

介 良 遺 跡

— 介良川都市小河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書 —

1997. 3

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター



# 介 良 遺 跡

— 介良川都市小河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書 —

1997. 3

(財)高知県文化財団  
埋蔵文化財センター





調査区全景（北より）



卷頭カラー 2



土師器



須恵器



須恵器・甗・把手付椀





## 序

近年、自然環境との調和のとれた開発が注目されておりますが介良川においても、自然環境との共生をめざし水に親しめる河川として周辺の公園化と一体となった河川改修事業が行われることとなりました。計画地内には、高知市でも最も広範囲な遺跡であります介良遺跡が所在しておりますことから、平成7年7月から試掘調査が高知市教育委員会によって実施されましたところ、古墳時代を中心に弥生時代前期から中世に至る多量の遺物が出土しました。

この介良地域は、古代の文献資料であります「和名抄」以来、文献資料に幾度も登場するなど歴史のある地域として知られています。このように恵まれた歴史環境の保全を計り後世に伝えてゆけるように、開発部局と文化財保護部局の間で協議が重ねられましたが、記録保存によって後世に伝えることになりました。

発掘調査は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知市より委託を受け実施され、高知県中央部では最古級となる須恵器や古墳時代の木製農具などが出土するなど多大の成果を得ることができました。今回の報告書が介良地域の歴史を復元するだけでなく、高知県の古墳時代を考える一助になれば幸いです。

最後になりましたが、地元介良地域の方々や発掘調査に関わられた方々にお礼申し上げますとともに、高知市をはじめ関係各機関の深いご理解とご協力に感謝いたします。

平成9年3月

財団法人 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター  
所長 古谷 碩志



# 例 言

1. 本書は介良川都市小河川改修事業に伴う介良遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 介良遺跡は高知市介良仁王講ほかに所在する。
3. 発掘調査期間 平成8年5月7日～平成8年11月18日  
整理期間 平成8年5月7日～平成9年3月31日
4. 調査面積 3000㎡
5. 調査は、高知市から(財)高知県文化財団が委託を受け埋蔵文化財センターが実施した。  
調査態勢は以下のとおりである。
  - (1) 調査担当  
田坂京子(埋蔵文化財センター専門調査員)  
坂本憲昭(同 調査員)
  - (2) 総務担当  
田岡英雄(埋蔵文化財センター総務課長)  
吉岡利一(同 主幹)  
石川 馨(同 主事)
6. 本書の作成は、Ⅱ章、Ⅲ章の遺構については田坂が作成・執筆しその他は坂本が作成・執筆した。編集は坂本が行った。
7. 検出遺構は土坑(SK)、溝(SD)で標示している。グリッド杭の座標値は全て公共測量座標のⅣ系である。
8. 図版の遺物番号は写真番号と一致する。写真図版だけのものはNo.を記した。
9. 調査区の地形測量は株式会社アイシーに委託した。出土遺物の木器については保存処理と樹種鑑定を京都科学株式会社に委託した。また鉄器についても保存処理を京都科学株式会社に委託した。
10. 発掘作業・整理作業では下記の方々の協力を得た。  
(重機掘削) 共運工業有限公司  
(発掘作業) 池田久利、島津忠利、島津清代香、足立智代、松本千代、久家隆、末政則幸  
末政淑子、影山康恭、入野光代、池本幸子、馬詰敏雄、馬詰春尾、高松朝一  
久家峯、森岡亜衣、藤本影男、末政成夫、国則純一、田所希代江、坂東祐介  
(整理作業) 山中美代子、橋田美樹、宮地佐江、澤本友子、黒岩佳子、益井和子、橋田真佐  
山安智子、門田真矢、飯田縁、島崎美恵子、清水芳江、西内広美、山本裕美子
11. 発掘及び報告書作成にあたり、下記の諸氏及び埋蔵文化財センターの諸氏から助言・教示を賜った。(敬称略)  
工楽善通、松井章、植野耕三、田中清美、田上浩、
12. 介良遺跡の図面・遺物については96-10KKと注記し高知市教育委員会が保管する。
13. 須恵器の編年については『陶邑Ⅲ』によった。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査について	5
1. 調査の概要	5
(1) 試掘調査の概要	5
(2) 本調査の概要	5
(3) 基本層序	6
2. 遺構	11
SK 1	11
SD 1	11
貝塚状遺構	11
SR 1	16
SR 1 出土遺物について	16
(1) 弥生土器	16
(2) 古墳時代の土器	17
(3) 古代の土器	20
(4) 木器	21
(5) 鉄器	22
(6) 玉類	22
(7) 石器	22
まとめ	34

## 挿 図 目 次

第 1 図	高知市位置図	第 9 図	SR 1 出土土器
第 2 図	周辺遺跡位置図	第10図	SR 1 出土土器
第 3 図	調査区位置図	第11図	SR 1 出土土器
第 4 図	セクション図	第12図	SR 1 出土木器
第 5 図	遺構図	第13図	SR 1 出土木器
第 6 図	SD 1, 貝塚状遺構出土遺物	第14図	SR 1 出土玉類・鉄器・石器
第 7 図	SR 1 出土土器	第15図	SR 1 出土石器
第 8 図	SR 1 出土土器	附図	調査区地形図

## 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡名表
第 2 表	木器樹種鑑定表
第 3 表	遺物観察表 (SD 1, 貝塚状遺構出土土器)
第 4 表	遺物観察表 (SD 1, 貝塚状遺構出土遺物)
第 5 表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第 6 表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第 7 表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第 8 表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第 9 表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第10表	SR 1 出土遺物観察表 (土器)
第11表	SR 1 出土遺物観察表 (土錘)
第12表	SR 1 出土木器法量表
第13表	SR 1 出土遺物観察表
第14表	SR 1 出土遺物観察表 (石器)

# 写真図版目次

- P L. 1 調査区完掘状況、調査 I・II 区完掘状況
- P L. 2 S D 1 完掘状況、貝塚状遺構 1 検出状況
- P L. 3 調査区調査前遠景、S D 1 土器出土状況、S K 1 検出状況、貝塚状遺構 1  
セクション検出状況、I 区杭列検出状況、II 区杭列検出状況、須恵器甕出土  
状況、須恵器甕下面出土状況
- P L. 4 No. 43、No. 51、No. 64、No. 105、No. 106、No. 107、No. 111、No. 114 出土  
状況、木製部材出土状況
- P L. 5 出土土器 (S D 1、貝塚状遺構 1、S R 1 出土)
- P L. 6 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 7 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 8 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 9 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 10 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 11 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 12 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 13 出土土器 (S R 1 出土)
- P L. 14 S D 1、貝塚状遺構 1、S R 1 出土遺物 (青銅器、玉類、鉄器、石器)
- P L. 15 出土木器 (S R 1 出土)
- P L. 16 出土木器 (S R 1 出土)
- P L. 17 出土木器 (貝塚状遺構 1、S R 1 出土)
- P L. 18 出土木器 (S R 1 出土)
- P L. 19 出土木器 (S R 1 出土)
- P L. 20 貝塚状遺構出土自然遺物

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

介良遺跡は、高知市介良に所在する。平成3年に高知市教育委員会によって行われた遺跡分布調査によって発見された弥生時代から中世にかけて遺物の散布する遺跡である。介良遺跡は広範囲にわたる遺跡で、高知市の中でも西部地域の朝倉に所在する縄文時代から古墳時代までの遺物が多量に出土したことで知られる柳田遺跡に匹敵している。今回調査の行われた調査区は遺跡の東端に位置し介良川の右岸にあたる。調査が行われる発端となったのは、平成7年度から遺跡の東限を区切る介良川が「ふるさと川のモデル事業」によって周囲の景観や地域整備と一体となった河川改修を行い、良好な水辺空間を形成し市民に親しまれる川となることを目的に都市小河川改修事業が行われることとなった為である。このような状況を受け文化財保護部局である高知市教育委員会と計画主体である高知市河川水路課の間で協議が持たれ、平成7年度に高知市教育委員会によって試掘調査が行われ、計画地内約12,000㎡を対象に遺構・包含層の有無を確認し本調査の範囲を確定した。

試掘調査の結果、遺構は確認できなかったが、遺物包含層は調査対象地域のほぼ全域で確認され土器や木器が多量に出土した。出土した遺物の時期は、弥生時代前期から中世までであるが、古墳時代の遺物とその多くを占める。遺物の中で特に木器は当遺跡が低湿地に立地するため残存状況が良好であった。この結果を受け高知市教育委員会は、試掘調査が行われた地域全域において、記録保存を目的とする本格的な調査の必要があると判断した。

平成7年度中に、高知市河川水路課、高知市教育委員会、高知県教育委員会、高知県文化財団埋蔵文化財センターが本格的な発掘調査を行うための協議を行い、高知市河川水路課から高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を受託して行うこととなった。平成8年5月7日から本調査に着手し、調査が終了したのは同年11月18日であった。途中梅雨の季節もあり、低湿地であるため水に苦しめられての調査であった。



作業風景

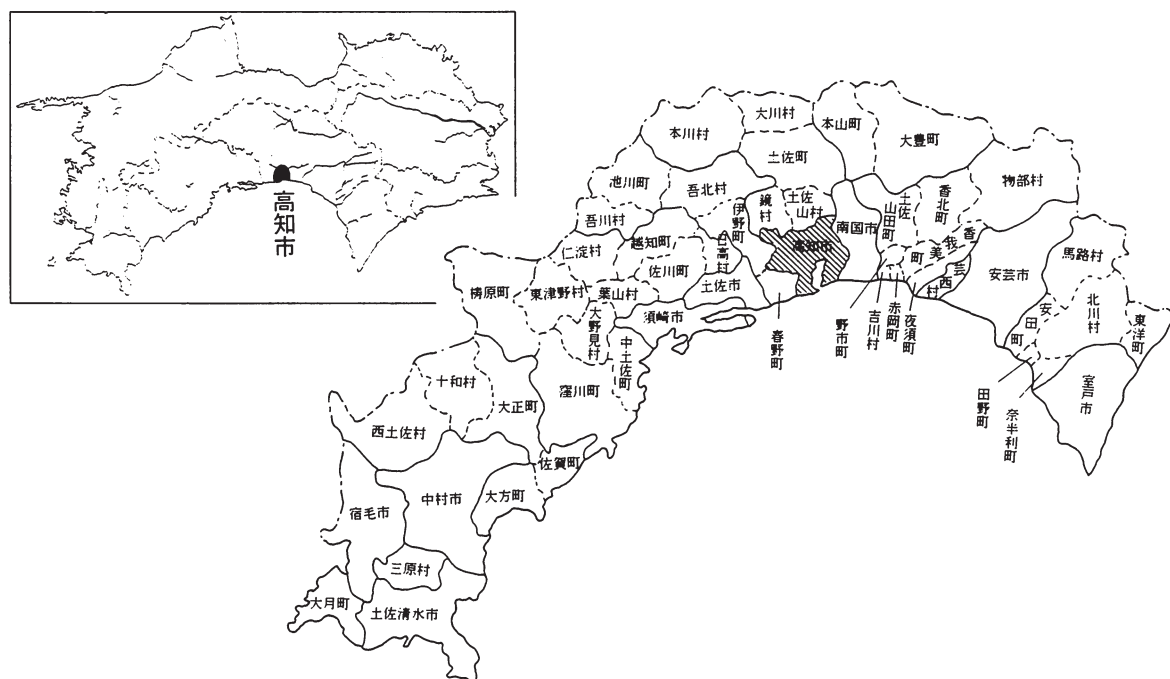
## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

介良遺跡は、高知市介良乙に所在し介良川の西方に広がる広範囲な遺跡である。介良遺跡の絶対位置は、東経133°36'40" 北緯33°33'33"である。遺跡の所在する介良地区は高知市中心部より東に位置し、浦戸湾東岸にあたる。介良地区が行政区画上、高知市に属すようになったのは、昭和47年と比較的新しく、それ以前は長岡郡介良村であった。

地理的には、南国市と境を接し、南東部には鉢伏山が、北部には高天ヶ原山（介良地区側では高間原、大津地区側では高天ヶ原と呼ばれる。）がそびえる。西部は低地であり、古くは浦戸湾がかなり奥まで広がっていたと考えられている。河川では介良川が高天ヶ原山麓を北東から南西に向けて流れ下田川に合流し浦戸湾に注いでいる。北側の大津地区の高天ヶ原山から連なる丘陵部と南の鉢伏山に連なる丘陵部の中間の平野部には河原石と考えられる礫層が堆積していることがボーリング調査で判明している。この礫層は介良川による堆積作用によって形成されたと考えられ、旧介良川は、現在の介良川と比べて堆積作用の大きな河川であったと思われる。この平野部は標高が約2 mと低く、以前は浦戸湾が大きく入り込み介良川の河口部にあたっていたと思われる。

介良地区は、比較的広い平野部を持っていることから、高知市中心部近郊の有力な農村地帯であったが、高知市の人口増加と昭和47年の合併により急速に開発が進み、高知市のベッドタウンとして幾つかの団地も建設されている。介良遺跡の介良川を挟んだ東側の対岸にも初期に建設された中野団地が広がっているが、今回の調査された調査区の西側は市街化調整区域であるため開発が行われておらず、まだ往時の農村の面影を残しており、介良遺跡が壊されず西側に広がっている可能性も考えられる。



第1図 高知市位置図





第2図 周辺遺跡位置図

遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 高間原弥生遺跡	弥生	8 朝峯橋北西遺跡	古墳時代
2 高間原古墳群	古墳時代	9 花熊城跡	中世
3 介良中野遺跡	弥生～中世	10 宮ノ谷遺跡	古代
4 介良野遺跡	古代～中世	11 西養寺跡	中世
5 介良城跡	中世	12 介良白水遺跡	古代～中世
6 宮ノ谷古墳	古墳時代	13 鹿兒遺跡	中世
7 朝峯神社前遺跡	古墳時代	14 鳴谷貝塚	古墳時代

第1表 周辺遺跡名表

## 2. 歴史的環境

介良地区は高知市縁辺部で丘陵、山地が見られるため、沖積地で中世以前の遺跡が少ない中心部と比べて比較的遺跡の多い地域である。介良地区の歴史は高天ヶ原山から細石核が見つかっており、旧石器時代末まで遡ると考えられるが縄文時代の遺跡は現在のところ確認されていない。

弥生時代以降遺跡の数は増加し、弥生時代の遺跡では、本遺跡や介良川を挟んだ東側の介良中野遺跡、高天ヶ原山上の高間原弥生遺跡などが知られている。古墳時代の遺跡では、6世紀半ばから7世紀にかけての古墳が周辺丘陵で確認されている。なかでも高間原古墳群は県内でも、有数の古墳群として知られている。古代に入ると、文献にも介良の地名が現われ始める。『和名抄』では、長岡郡九郷の一つ気良郷として記載されている。また『日本地理志料』によれば気良郷は「介良・屋頭・五台山・池・仁井田・種崎諸邑、為古ノ郷域」と記されており、現在の高知市浦戸湾東岸一帯にあたる。延喜式内社である朝峰神社も鉢伏山の北の峰にあたる介良山の西麓に鎮座し、郷内の神社とされるなど、古墳時代以降この地域が順調に発展したことが窺える。

中世になると、中世の基本史料として知られる『吾妻鏡』の寿永元年（1182）九月廿五日の条に「土佐冠者希義者。武衛弟也。去永暦元年。依故左典厩縁坐。配流干當國介良庄」として介良の地名が出てきている。同書によると、希義は、頼朝の挙兵に呼応する事を恐れた平家の者によって討ち取られたが、死後希義の師であった琳猷上人によって墳田郷に手厚く葬られ、その後頼朝は希義の菩提を弔うために一箇・宇（後の西養寺）を建てたとある。

介良庄成立時の荘園領主は不明であるが希義を葬った琳猷上人が頼朝に希義の鬢髪を持って関東を訪れた際、走湯山の僧良覚を介することから平安時代末には走湯山領になっていたと推定される。

その後暦仁年間（1238～39）に、介良三ヶ郷（成武郷、仲潮田郷、本郷）のうち成武郷、仲潮田郷は伊豆走湯山密厳院に寄進され、本郷は貞応二年（1233）鎌倉幕府により曾我太郎助綱に与えられた。鎌倉幕府滅亡後両者の間にしばしば争いがあったようであるが、武家勢力の伸張の前に領家側の勢力は後退して行き南北朝になると実質的には、守護細川氏の勢力下に入ったと考えられる。

戦国時代の介良庄は、地頭である花熊城主（介良城）横山氏によって支配されていたが、天文十六年（1547）長宗我部国親に横山氏が降伏し、以後、長宗我部氏の支配下に入った。江戸時代を迎えると土佐藩領長岡郡介良村となった。江戸時代で特筆すべきことは、介良村地獄谷（現在の稲生周辺）などで石灰石が発見され、その採掘が領内の豪商桜屋などによって始まったことである。また村内岩屋地区では、土佐で始めての米の二期作が行われたと伝えられており、介良地区が豊かな田園地帯であったことが窺える。

明治になると、明治22年の市制町村制施行によって長岡郡介良村となり現在の介良地区の基礎が確立する。第二次世界大戦後は、高知市が拡大・発展するに従い、米作・園芸作物など中核都市近郊の農村として栄えるが、昭和47年に高知市と合併し新興住宅地として人口増加が進む一方で園芸作物を中心とする農村の雰囲気が残っている。

参考文献 『高知県の地名』日本歴史地名体系 1983年 平凡社  
『角川日本地名大辞典39高知県』 1986年 角川書店  
『高知地盤図』1992 社団法人 高知県建築設計監理協会 創立20周年記念事業『高知地盤図』刊行委員会

## 第Ⅲ章 調査について

### 1. 調査の概要

#### (1) 試掘調査の概要

平成7年10月16日から11月18日まで行われ5 m×5 mテストピットを25ヶ所設定し行われた。

調査区は大きく2ヶ所に分けられ、Ⅰ区は調査区で北側介良川上流で、後期古墳群として知られる高間原山の下にあたる。遺構は検出できなかったが、包含層が確認でき、弥生時代前期と、後期の土器、古墳時代の土器が出土する。特に弥生時代前期の土器は高知市では、柳田遺跡に次いでこの出土であり注目された。

Ⅱ区は、介良川の下流側にあたり、付近には式内社である朝峰神社が所在し古くから開発が行われた地域であることがわかる。古代、中世の遺構・遺物の確認が期待されたが、遺構は確認されなかった。包含層は確認され多量の遺物が出土した。出土遺物は古墳時代の土器と弥生時代後期後半の土器が大半を占めている。特に残存状況の良い木器は注目され、竪杵や中世のものと考えられる木簡が出土している。

#### (2) 本調査の概要

本調査は、試掘調査の結果を受け平成8年5月7日から行われた。調査区は任意に設定し、介良川下流側（南）からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。Ⅰ区とⅡ区の間はベルトとして残し調査終了直前に完掘し、Ⅰ'区とした。調査完掘後は、Ⅰ区、Ⅱ区を分けるものではなく、完掘後の写真、図面等では調査区は大きく2区に分けられている。本書では、発掘調査時の調査区名によって記述してゆく。

#### Ⅰ区

Ⅰ区は調査区の最も南側で介良川の下流側に位置する調査区である。溝状遺構1条、貝塚状遺構3基と旧介良川と考えられる流路跡が確認された。調査区西側部分はこぶし大の礫層（河原石）が広がり河原であったと考えられる。旧流路跡は東側に向かって落ち込み川底に至るが東側の立ち上がりと肩部は確認できなかった。旧流路跡の流れは現在の介良川と並行し南に流れると思われ東側の肩部は現在の介良川によって切られていると考えられる。トレンチを設定し下層の確認を行ったが、標高約0.1mで、砂層が確認されこの層からは多量の湧水があり、これ以上の掘り下げは不可能であった。この標高でほぼ旧流路跡の川底になると考えられる。

#### Ⅱ区

Ⅱ区は調査Ⅰ区の北側に位置し、旧流路跡が確認できた。また流路跡からは2ヶ所遺構の可能性がある場所が確認され、一ヶ所は直径約5 cmの杭が列状に並び濤標の可能性が考えられる。また汀線近くの流路跡埋土中からは5世紀後半とされる須恵器の甕が一個体ほぼ完形で出土しており、祭祀遺構の可能性が高いと考えられるが、掘方は検出できず埋め甕とは確認できなかった。

旧流路跡はⅠ区の北側からやや東側に流れを向けながら、この調査区の中央部で最も流路を西に寄せ、ここから方向を東側に反転してゆく。

#### Ⅲ区

Ⅲ区は、本年度の調査区の中で最も北側の調査区である。土坑が検出されたが調査区南端部に設

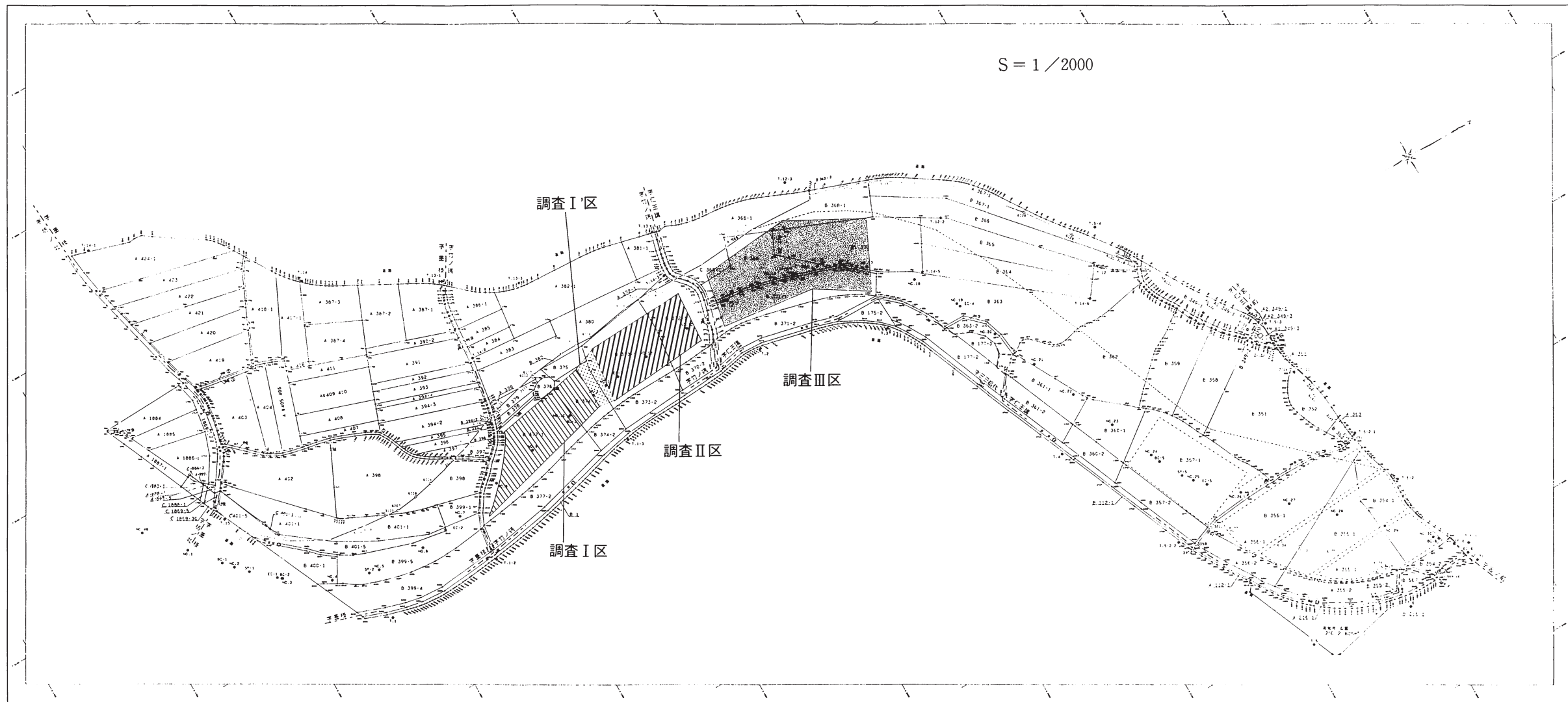
定されたトレンチによって半裁されていた。この土坑の埋土中からは弥生時代後期の土器が出土するが、底形が不整形なことなどから自然遺構の可能性が高いと考えられる。旧流路跡の最も深い川底は検出できなく、流路跡はⅡ区で向きを大きく東に変え現介良川と重なると考えられる。旧河道は確認できなかったが汀線近くの堆積層が確認でき、5世紀前半と考えられる須恵器が出土しナスビ形木製農具・槽などの木製品も出土している。調査区西側では黄色粘質土があり今回の調査区では唯一、地山が礫層（河原石）でない部分が検出できた。調査区の西側に遺構が存在する可能性が考えられる。

### (3) 基本層序

調査区の東側半分は殆ど介良川の旧流路跡であり、その堆積層序も全ての調査区を通じて基本的には同じである。

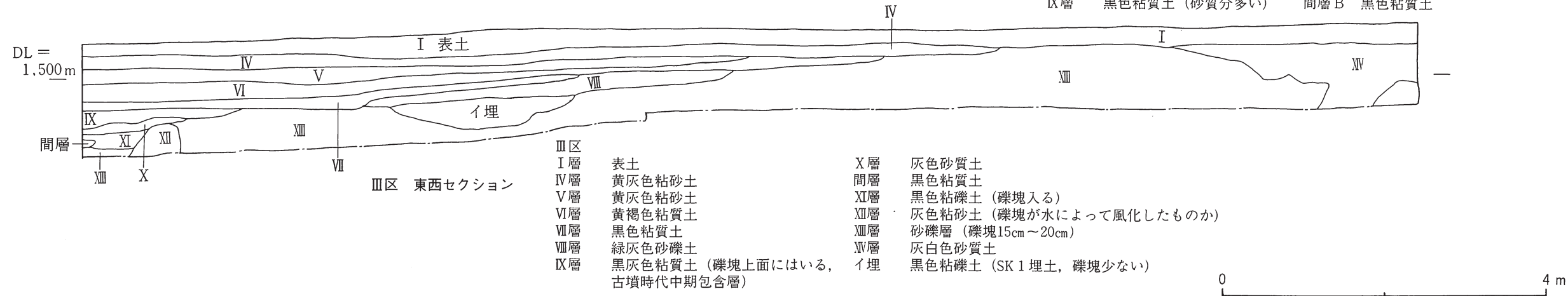
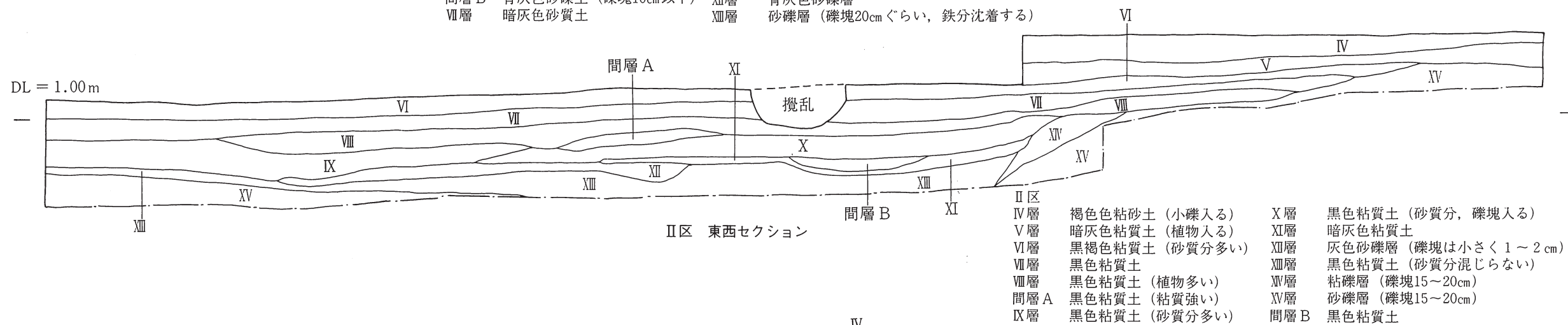
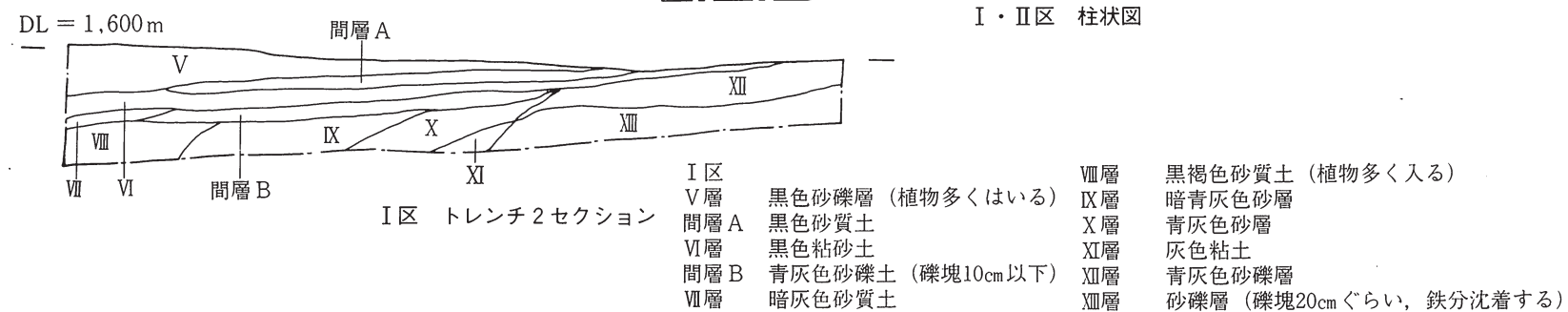
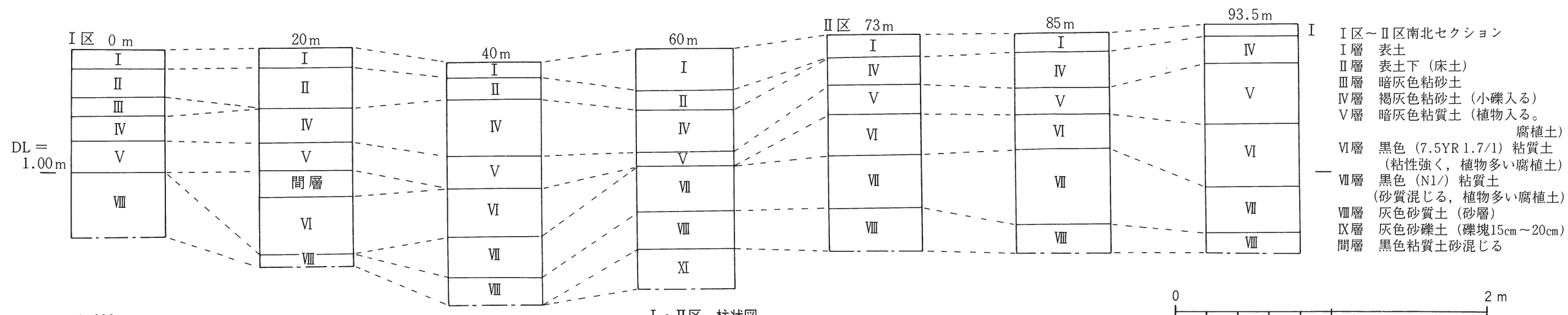
旧流路跡のラインは調査区に対して逆「く」字に流れており、Ⅲ区はⅠ区と比べると汀の部分が高く完掘した後の標高は最も深い部分でⅠ区が約0.8mであるのに対してⅢ区は1.1mで旧流路跡の川底まで検出できなかった。

Ⅰ層は現在の表土であり標高は約1.8mである。Ⅱ層は、耕作時の床土である。Ⅲ層は、調査区南側に存在し中央部で消え調査区北側ではⅡ層の直下にⅣ層が堆積する。Ⅳ層は小礫が比較的多く混じった褐灰色粘砂土でわずかに遺物が混じる。遺物は中世の白磁Ⅸ類の口禿げの皿が出土しているが遺物の量は少なく、原因地から遠い流れ込みと考えられる。小礫が混じることからこの時期洪水によって小石まじりの粘質土が堆積し流路が現在の流路側である東に移ったのではないかと考えられる。その後比較的安定した地盤となって耕作が開始されたと考えられる。この層もⅡ区では明確に検出できなかった。Ⅴ層以下は複雑な堆積を示し、植物の多く入る腐植土に比較的目の荒い砂が間層として入る堆積をしており流路に水が流れていたことが分かる。Ⅴ層以下が古代以前の包含層と考えられ、古墳時代を中心に多くの遺物が入る。古墳時代の遺物は大きく3時期のものが出土しているが明確に層位による時期区分ができなかった。弥生時代の遺物はⅦ層より下で湧水が生じはじめるⅨ層（砂礫層）の上面に入ると考えられるが、純粋な弥生時代の遺物包含層は、溝状遺構、土坑に堆積していた黒色粘質土と思われ、Ⅸ層の弥生時代も遺物は流れ込みによる二次的な堆積と考えられる。



第3図 調査区位置図





第4図 セクション図





## 2. 遺 構

### SK 1

Ⅲ区の南壁近くで検出された楕円形の土坑であるがトレンチによって半裁されており、半円形状のプランを呈する。長辺2.0m、短辺0.88m、深さ約49cmであり、底面は段状に落ち込み2段になっており底面は礫層のため湧水する状態で、埋土は黒色粘質土の単層であった。

出土遺物は叩き目の残る弥生後期の甕が多く、細片も含めると全部で325点出土しているが、復元実測できるものはなかった。器種としては、甕以外にも壺、鉢などが、僅かながらみられた。体部片では、細片にいたるまで多くの土器片にタタキ目が残るが、なかには縦方向のハケ目が見られるものや、ハケ調整をナデ消しているものもみられる。また内面にはハケ目や指頭圧痕が見られる。

遺物の時期については、弥生時代後期の遺物がほとんどであるが、前期、中期末の遺物もわずかに出土している。流れ込みによって混入したものと考えられる。性格は不明だが風倒木などによる自然遺構の可能性が高いと思われる。

### SD 1

SD 1はⅠ区の南端部において、旧流路の汀と考えられる礫層が流路（東方向）に向かって落ち始める落ち口で南北方向に伸びる状態で検出された。方向やや東の方向にゆるやかにカーブしており、ほぼ旧流路であるSR 1に沿った形となっている。遺構の北端は、Ⅰ区トレンチ2の手前の貝塚状遺構の付近で不明瞭となり、はっきりした跡をたどれなくなり旧流路に合流すると考えられる。

検出された長さは約11mで幅は40～46cmで、深さは16～26cmと浅く断面形は半円形状で底面は南に向かってやや傾斜している。埋土は黒色粘質土の単層であった。

出土遺物は土器が、細片も含め約1400点出土しているが、完形になったものはない。その多くはタタキ目をもつ甕の細片であり、それ以外には、鉢、壺、高杯などの器種が出土している。

壺は、直立する頸部や強く外反する口縁部などがみられる。高杯は脚部に円孔を持つ脚部が出土する。図示できたものは15点で、弥生時代後期の二重口縁壺1点、口縁部9点、底部3点、混入と思われる弥生時代前期の土器と須恵器2点である。

土器以外では南端部より約8mの位置で舶載鏡と思われる内行花文鏡片が出土している。縁辺部に近い小破片であり、「寿如金石」と考えられる銘帯の一部と花文の端部が残存している。断面の一部は摩耗してやや丸みを帯びている破鏡で、復元寸法は8寸程度になると考えられる。出土状況から考えると流れ込みによるものと思われる。高知県で弥生の遺構から出土した鏡片としては、田村遺跡群（2点）、西分増井遺跡（1点）、に次いで3例目（4点目）で注目される。遺物の時期は一点弥生時代前期の甕の一部が出土しているが、残りはすべて弥生時代後期の土器であり、弥生時代後期末と考えられる。

### 貝塚状遺構

Ⅰ区旧流路の汀線に位置する。トレンチ1とSD1の間に挟まれたところで3カ所検出されたが、いずれも小規模な貝塚状遺構である。

貝塚状遺構の時期は出土遺物からみて古墳時代と思われる。この貝塚状遺構はその規模から集落によって形成されたものとは考えられず、一家族程度の人数が一時的に生活廃棄物を捨てたものではないかと思われる。出土する自然遺物の全てが当時の人々の食糧であったと断定することは難しいが、魚骨や貝類をみると、河川及び海洋性のものが多く、浦戸湾東岸に立地する地域性を考えると日常的に入手できるものであったと思われるため、交易によって遠隔地からこれらの遺物がもたらされた可能性は少ないと考えられる。

高知県で確認されている貝塚で最も有名な貝塚は県西部の宿毛市に所在する宿毛貝塚で縄文時代後期の貝塚である。高知市では縄文時代の貝塚は現在まで確認されていなく、古墳時代の貝塚として浦戸湾東岸の五台山山腹に所在する鳴谷貝塚が一カ所確認されているのみである。今回の貝塚状遺構は小規模ではあるが古墳時代の食生活復元する上で重要な資料を提供するだけでなく、浦戸湾の汀線の復元をする上でも貴重な資料となった。

#### 貝塚状遺構 1

検出された中で最も大きな貝塚状遺構で、長辺に1.96m、短辺1.5mの不整形な楕円形のプランで浅いレンズ状に掘り込まれている。混貝土層は浅く、最も厚いところで12cm程度である。貝層は黒色砂質土との混貝土層の単一層で、貝類や植物などの遺物が多量に含まれる状態であった。出土した自然遺物は多種にわたっている。中でも最も多く出土したのは貝類であり、重量にして12.2kgであった。

貝類の種類としてはハイ貝が最も多く、ついでカキが多くみられ、この2種類が大半を占めている。その他には、海ニナ科、川ニナ科の巻き貝が少量みられただけである。

貝類以外の自然遺物では、植物種子、骨（獣骨と魚骨）獣歯、その他小さな木片など出土した。種子ではウリ又はヒョウタン科の種子ではないかとみられるものが出土しており、栽培の可能性も考えられる。魚骨ではスズキ科やクロダイの骨の一部と思われる魚骨が出土している。量的には多くないが汽水域に生息する魚類の骨であることは介良の古環境を復元する上で興味深い。獣骨ではイノシシと考えられる骨や、種類は特定できないがイノシシまたはシカと考えられる上腕骨の一部とみられる獣骨などが出土している。また獣歯では、タヌキ、イヌ、シカの歯が確認できた。

その他遺物では、土器、小玉、銀環、木製の堅杵なども混貝土層中から出土している。土器は細片が131個出土しているが、器種が特定できたものとしては高杯が7点、杯の蓋2点、壺、甕の底部2点、甌の把手1点である。土器体部106点中でタタキ目のあるものは6点あり、他はナデ調整で仕上げている。わずかではあるがハケ目の残るものも出土している。内面の調整はナデであるが、ハケ目のみられるものも若干みられる。

須恵器では、体部細片が108点、口縁部が40点、底部が6点出土している。体部片のうち52点は甕であり、他は小型壺1点、杯蓋11点、不明37点である。口縁部は、杯蓋が28点、杯身が5点、不明7点であるが、杯蓋には5世紀代とみられるものが存在する。底部片は、高杯脚部2点、杯身3点、高台付き壺1点が出土している。

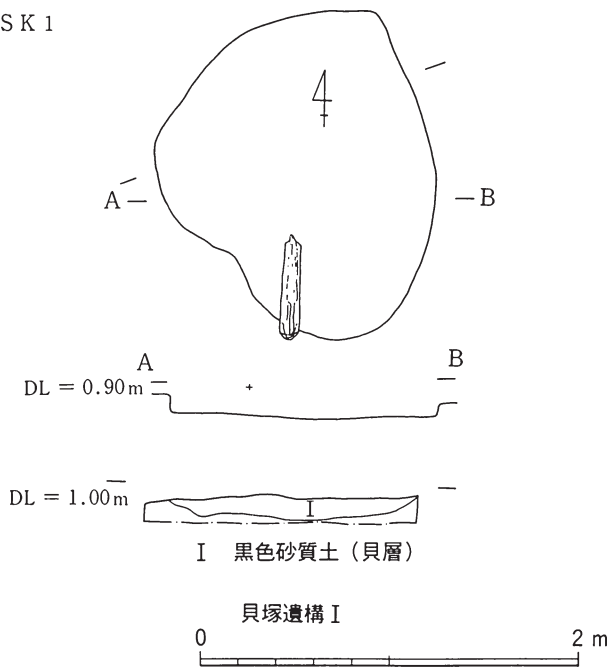
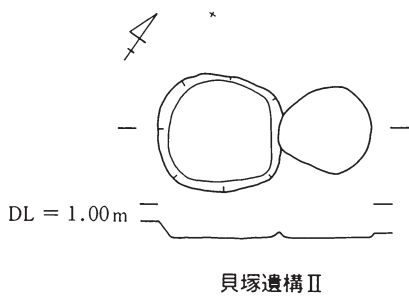
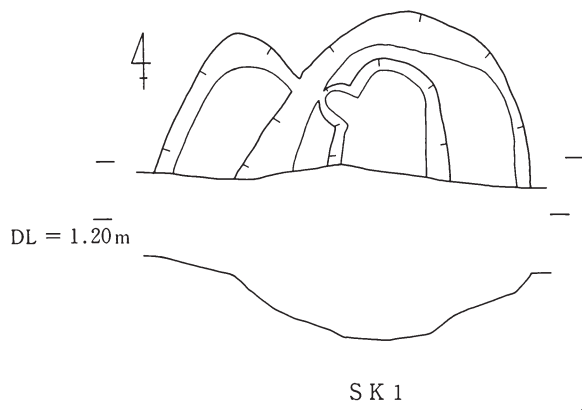
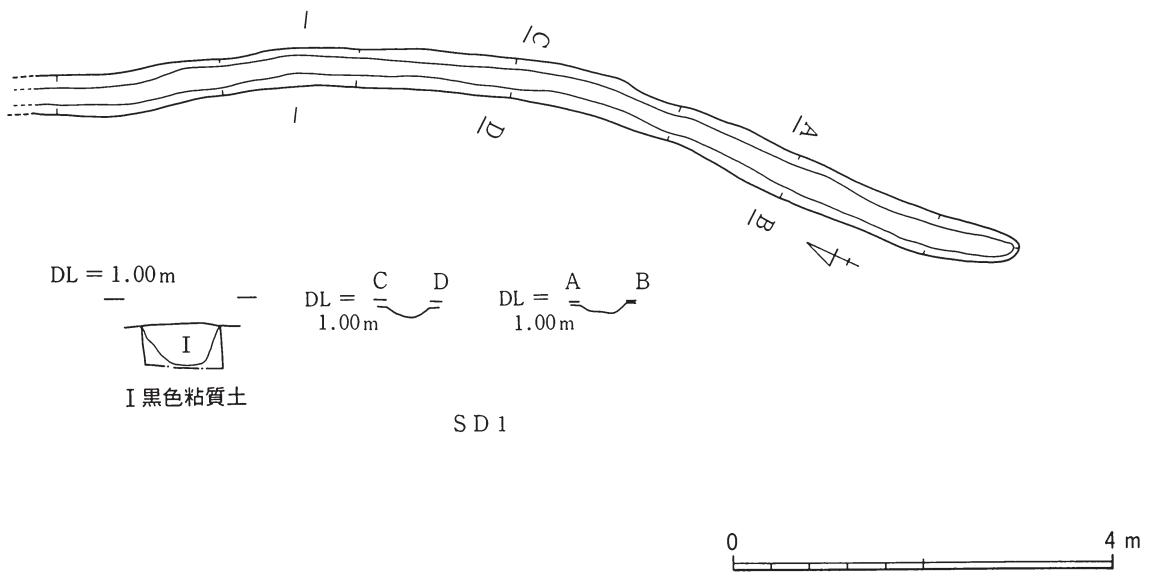
#### 貝塚状遺構 2

貝塚状遺構 2 は0.66m×0.6mのほぼ円形のプランでありわずかに掘り込まれており、混貝土層

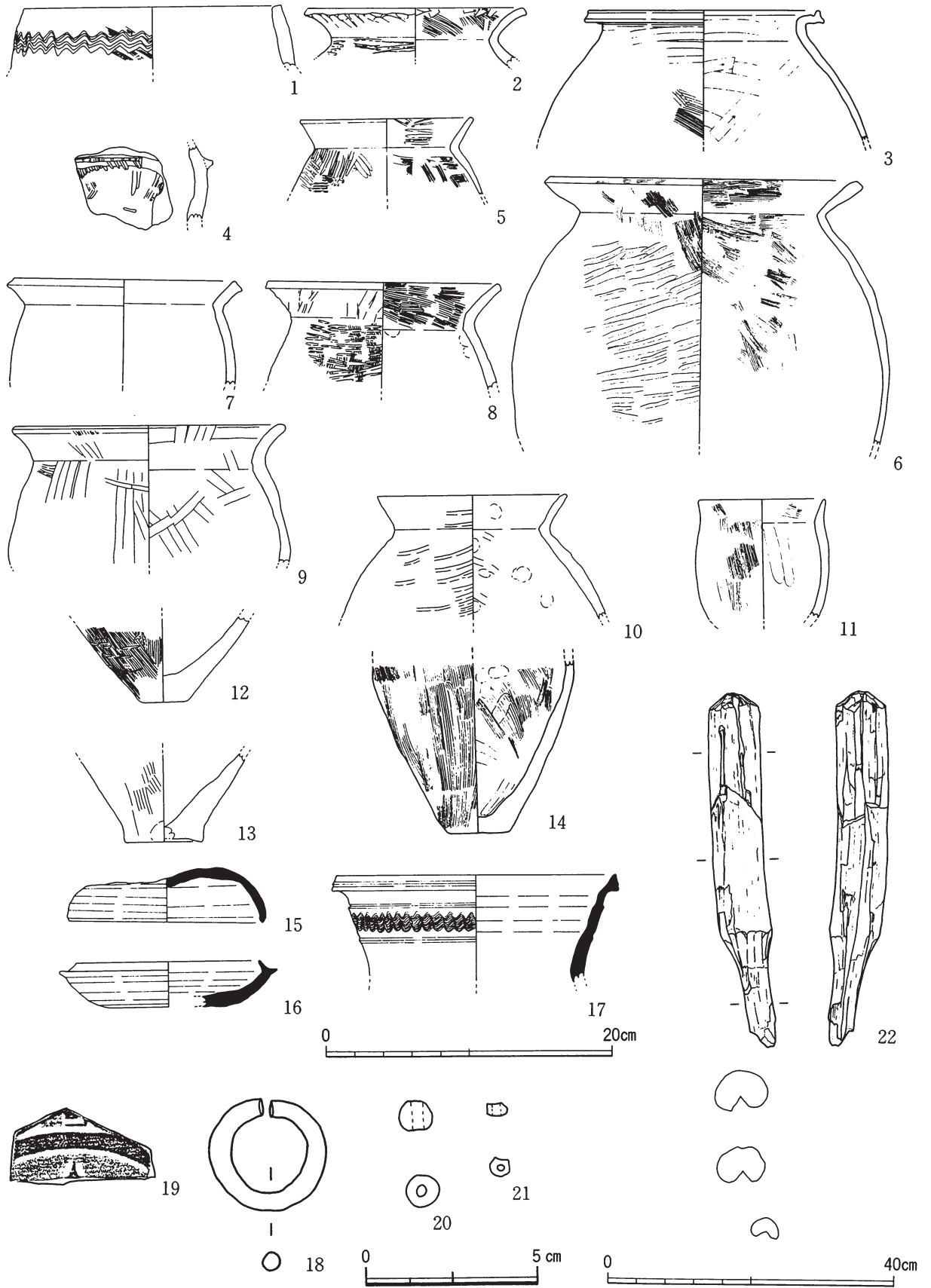
の深さは約 9 cmであった。出土遺物は、自然遺物は貝類150 g、獣骨 4、魚骨 2 と土器細片12点が出土しており、貝類は大半がハイ貝であった。土器の体部片でタタキ目の残るものが 4 点あった。須恵器は細片で 6 点出土。2 点は坏の一部であった。

#### 貝塚状遺構 3

貝塚状遺構 3 は0.5m×0.46mの円形のプランで混貝土層の深さはわずか 4 cmであった。出土遺物は、自然遺物が獣骨 4 点、魚骨 2 点で貝類はカキと、ハイ貝がほとんどで総重量400 g 出土している。土器は細片で 5 点あり、そのうちタタキ目の残るもの 3 点、内面ハケ調整のもので外面ナデ調整のもの 1 点がみられる。



第5図 遺構図



第6図 SD1 貝塚状遺構出土遺物

## SR 1

旧流路跡は、全ての調査区で検出されており、逆「く」の字状に調査区を貫いている。流路跡はⅢ区で最も西側に寄り東に向きを変えて行く。このためⅢ区では汀が広く流路跡の最深部は現在の介良川の流路によって切られている。調査区は礫層が基底層として確認されており、この礫層は調査区中央部（標高1.7m）から東西方向にU字状に落ち込み調査区東端部で最も底部（標高約0.1m）に至る。流路の埋土はⅣ層以下が相当する。流路跡が埋没し安定した陸地化したのはⅣ層が堆積した後と考えられる。時期としてはⅣ層中から青磁Ⅰ－Ⅴ類、白磁Ⅸ類が出土しており13世紀後半から14世紀代と考えられる。

埋土のⅤ層以下からは遺物が多量に出土しておりその多くが古墳時代の遺物である。古墳時代の遺物は植物の多く入る腐植土中から出土している。腐植土は流速の緩やかな時期の堆積であり遺物は原因地从り遠くない位置で出土していると考えられる。遺物の中には舟形木製品をはじめ初期須恵器、手捏土器などの祭祀遺物が出土しており、河川祭祀が行われていたと考えられる。

調査区の東側には介良川が流れているが、その方向はほぼ流路跡と並行しており、検出された流路跡は介良川の旧流路であったと考えられる。

## SR 1 出土遺物について

### (1) 弥生土器

弥生時代の遺物は、壺、甕、高杯、鉢の器種が出土し、甕がその多くを占める。試掘調査では調査対象地の北側から弥生時代前期の土器が出土しており、今回の調査でも期待されたが、流れ込みによると考えられる前期の土器が数点出土したのみで、後期の土器がその中心であった。

#### 壺

壺は、後期のものが出土しているが、更に後期の中で3時期に分けることができる。

No. 3、No. 5は頸部が直立し口縁端部は上下に拡張され面をなし凹線文が施されている。この凹線文はやや明瞭さを欠きV様式、後期に入った時期のものと考えられ時期は後期前半であろう。No. 6は口縁部を拡張し2個一組の竹管文が施され端部下には刻み目が入る。この土器は凹線文の影響を受け口縁端部が拡張された在地の系譜を引く壺と考えられる。時期はNo. 3、No. 5と同時期と考えられる。

No. 1、No. 2、No. 7は長頸の壺である。いずれも口縁端部はやや凹面状をなしている。No. 1は頸部付け根に断面三角形の粘土帯が1条めぐっている。頸部が長くなっていることから後期中葉と考えられるが、凹線の影響や中期後半の在地系の壺に見られる口縁端部には凹線状の沈線がめぐり頸部に断面三角形の粘土帯がみられるなどの特徴がみられⅣ様式の影響が残っている。No. 2には胴部がわずかに残るが、外面にタタキ痕が残っている。No. 1とほぼ同時期と思われるが、やや後出する可能性もある。

No. 13、No. 14は後期末の壺の口縁部である。口縁端部しか残存していないが、外反しながら長く伸びる口縁部を持ち、端部が垂下する壺と考えられる。No. 18は頸部と胴部の境に断面方形の粘土帯を巡らせている。胎土は緻密で赤褐色の発色をする。高知県中央部では比較的少ない胎土で搬入

品の可能性が考えられる。時期は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期と考えられる。

#### 甕

甕は、後期後半のものを中心に出土している。No.24は器形的にはヒビノキ式の形態に近いが、タタキ目は全くみられず、外面には縦方向のハケ調整が残る。胎土・色調ともにヒビノキ式の典型的なものではない。内面には粘土帯の接合痕が顕著に残り、粘土帯巻き上げによって成形されたことがわかる。時期的にはヒビノキ式より少し古くなると考えられる。No.25はタタキ調整の後にハケ調整が行われた小型の甕で後期の半ば以降のものと考えられ、No.24と同時期ではないかと考えられる。その他では図示していないがヒビノキ式の甕が多く出土している。

#### 鉢

鉢は後期後半のものが出土している。やや尖底状の底部で直線的に開く体部のNo.32と、わずかに平底が残る半球形で碗形態のNo.33、No.34が出土する。外面はタタキ目が顕著に残るものと、ハケ調整によって丁寧に仕上げられたものがある。内面は3点とも口縁部から上胴部まで横方向のハケ調整が施される。弥生時代後期末でヒビノキⅡ式の時期と考えられるがヒビノキⅢ式段階に入る可能性も考えられる。

#### 高杯

明確に弥生時代の高杯と思われるものは少ないが、脚のみが出土したNo.36がある。外面には金属器で施文したと思われる沈線が巡り、脚部は3個一対、裾部は5個一対の直径約1cmの円孔が施されている。内面には絞りが残り充実する脚になると考えられる。

## (2) 古墳時代の土器

### 土師器

土師器は壺、甕、甗、鉢、高杯が出土し、小型丸底壺、手捏ね土器などの祭祀遺物も出土している。古墳時代前期と考えられるヒビノキⅢ式と考えられる遺物も出土するが、布留式、庄内式の甕は見られない。時期は古墳時代前期、中期（5世紀半ば）、後期（6世紀末、7世紀半ば）と考えられる。

#### 壺

二重口縁状を呈するものと、くの字に屈曲する口縁部を持つものが出土している。完形で出土しているものはないが胴部は球形になるものと思われる。いずれも外面は叩いた後、縦方向のハケ調整が行われるがタタキ目がわずかに残っている。No.20は口縁部が受け口状になって、胴部はやはり球形になると考えられる。No.19は外面はタタキの後ハケ調整が施され、内面は荒いハケ目が口縁下部までしっかり施され器壁を薄くしている。甕の可能性も考えられるが、頸部が狭く、球形の胴部を持つことから壺と考えられる。

#### 甕

器壁が薄くなり、No.27の様に口縁下部までヘラ削りが施されているものが出土している。No.29はヘラ削りはみられないが口縁下部までハケ目が残りハケ調整（木製の板状工具と考えられる）によって器壁を薄くしている。器形は、短い頸部から大きく開く口縁部を持ち、最大径が上胴部に位

置し長胴気味で丸底の底部を持つと考えられる。

#### 甗

No.30は、底部の一部しか出土していないが、丸底の底部に直径約7mmの円孔が6個残存する。焼成前に穿たれた円孔は10個程度であったと推定される。No.31は把手を持つ甗になると考えられる。

#### 鉢

No.35は丸底で内湾する体部を持つ椀状の形態で、内外面ともタタキ目は全く残らない。ヘラによるミガキが施され丁寧に仕上げられる。胎土は精選された粘土で黄色味を帯びた色調を呈する。

#### 高杯

高杯は、その坏部の形態によって大きく2種類に分類できる。一つは稜を持ち口縁部が開くもので、このタイプはさらに浅くて大きな坏部を有するNo.40とやや深い坏部を有するNo.41に分けることができる。もう一つは浅い椀状の坏部を持つものである。No.38はこのタイプで、製作技法は脚部と坏部は別個に成形され坏部に脚部を挿入して接合され、この後坏底部中央部に半球状の粘土を充填し仕上げられる。この製作技法は初期須恵器が登場する時期の土師器高杯に比較的多くみられる技法である。脚部で図示したのはNo.37の1点のみである。この脚部は円柱状の脚部から裾部がラップ状に開くものである。脚部内面には横方向のヘラ削り痕がみられ、脚部上部には上方に向かって棒状のもので粘土を押し込んだと考えられる痕が残る。

#### 小型丸底壺

小型丸底壺は5個出土しているが内2個は平底になっており厳密な意味の小型丸底壺ではない。器形は丸底のものはNo.45のみ上胴部に最大径がある。残りの2個は最大径が中胴部に位置し潰れたような球形を呈する。器面調整もNo.45はハケ調整であるがNo.43、No.44は外面には指頭圧痕が残り指ナデによる調整が行われている。平底のものは中央よりやや上に最大径を持ち上方に短く伸びる口縁部を持つ器形である。No.47は外面は口縁部と胴部の接合部にハケ目が残るがNo.48の外面にはハケ目はみられず、口縁部内面に横方向のハケ目がわずかに残る。

#### 手捏土器・ミニチュア土器

No.49はミニチュア土器で壺型になる。丁寧に作りで器面調整も行われている。No.50は丸底で球形の体部を持ち短い口縁部がつくと考えられる。No.51は平底の手捏である。

#### 須恵器

須恵器は、5世紀後半の高知県中央部では最も古い時期の須恵器が出土しているが6～7世紀が最も多く出土しており、おおむね5世紀後半、6世紀後半、7世紀半ばに遺物出土のピークがあると考えられる。器種は、坏、蓋、甗、壺、甕が多く出土するが、把手付き椀、播鉢も出土している。

#### 坏

坏は、時期の異なる3タイプが出土している。aタイプは口径は比較的小さく器高が高い器形で、受け部から立ち上がる口縁部が長いもので、いずれも口縁端部がやや内傾し段状になっている特徴がある。調整は、受け部直下は回転ナデが施され、その下は単位のせまいヘラ削りが底部まで行わ



れている。全体的にシャープなつくりで、時期は5世紀半ば、Ⅰ－3段階ではないかと考える。この時期の坏は高知県西部の具同中山遺跡群などで出土しているが、高知県中央部では出土例がなく高知県の須恵器を考える上で注目される。bタイプは口径に比して器高が低く、受け部から伸びる口縁部も短くなっている。調整は回転ナデ調整のみで、底部は回転台からの切り離し痕が調整されていなくヘラ切り痕が残っている。時期は、Ⅱ－4段階と考える。cタイプのNo.63は受け部を持たない坏で古墳時代末Ⅲ－2段階の時期と考える。

#### 坏蓋

坏蓋も、坏と同じく3時期に分類することができる。No.52は天井部と口縁部の境に明瞭な稜を有し口縁部は直線的に下方に下る。口径は比較的小さく器高は高い器高の半分以上を口縁部が占める。口縁部は内傾し段状に尖っている。調整は口縁部が回転ナデ、天井部は比較的单位の狭いヘラ削りで仕上げる。aタイプの坏の蓋になると考えられる。No.53、No.54、No.55は丸い器形で天井部と口縁部の境に稜は全くみられない。口縁端部は丸くなる。調整は丁寧に行われず、外面には明瞭に回転ナデ痕が残り天井部には切り離し時のヘラ切り痕が残る。坏bタイプの蓋になると考えられる。No.57はかえりが付き天井部には擬宝珠の摘みが付く。器高は低く天井部は平坦である。cタイプの坏の蓋になると考えられる。時期はそれぞれ対応する坏の時期になると考えられる。

#### 高杯

高杯は完形品の出土例がなく、脚部のみ図示できた。No.68は短く太い筒状の脚部から大きくラップ状に開き、端部は折り返されたように面をなしている。時期は古墳時代末と考えられる。No.70は短くハの字に開く脚部を持ち端部は面をなしている。長方形の透かしが入っていたものと考えられ、外面には自然釉がかかる。No.73は長脚の高杯の脚部である。長方形の2段3対の透かしが入ると考えられる。

#### 甗

甗は、時期の違う2タイプが出土している。No.64は胴部中央よりやや上に最大径を持ち肩の張った大きな胴部を持つ。基部の大きな頸部から口縁部は稜をなして外反して開く。頸部は波状文で飾られ、胴部にも二本の沈線の間には波状文を施した文様帯がみられる。口縁部から上胴部に自然釉がかかる。円孔は波状文の施文後文様帯に上方から下方に向かって穿孔されている。胴部下にはタタキ目がわずかに残り、不定方向のケズリ痕も残っている。時期はⅠ－2期と考える。No.65、No.66、No.67は上胴部に最大径を持ち肩の張った小さな球形の胴部を持ち頸部の基部は細くなっている。No.66、No.67は円孔の上に一条の沈線が巡るが、文様は施文されない。両方とも下胴部には回転ヘラ削り痕が残る。時期はⅡ－4期と思われる。

#### 把手付き碗

1点のみほぼ完形で出土している。コップ状の形態で、丸い断面形の小さな把手の付く小型の把手付き碗である。断面三角形状でわずかに突出する受け部より器高に比して長い口縁部を持ち口縁端部は上方を向き尖る。受け部下にはやや雑な波状文が施される。口縁部は回転ナデ調整、文様帯より下は不定方向の単位の高いヘラ削り痕が残る。Ⅰ－2期と思われる。

### 播鉢

体部から突出する円盤高台状の底部から直線的に立ち上がる体部。外面には凹線が2条施され、篋記号と思われる×印が残る。調整は内面に回転ナデ痕が残る。内面底部には使用によってできたと考えられる割れ跡がみられる。

### 壺

直口壺、無頸壺、広口壺が出土している。No.74は提瓶の口縁部の可能性も考えられる。No.77は頸部下と肩部に篋による指突文が施されている。時期はI段階の終わりと考えられる。

### 提瓶

口縁部のみ出土しているので、壺の口縁部の可能性もあるが、口径が小さく短く直線的に開くII-4の時期の提瓶の可能性が高いと思われる。

### 甕

No.79は、ほぼ一個体が完形で出土しており時期もI-3期と考えられ高知平野では最も古い須恵器甕の完形資料である。上胴部に最大径を持ち滑らかに開く口縁部、端部はわずかに上方につまみ上げられる。口縁部下には断面三角形の凸帯が巡り、頸部外面にはカキ目が残るヘラによる列点文が施文されている。口縁部内面に回転ナデ痕が残る。胴部外面には並行タキキ痕が残る、内面は同心円状のあて具痕をナデによって擦り消している。No.76は口縁部外面に波状文が施されている。大きく開く口縁部の下には断面三角形の貼り付け突帯が巡る。器形的にはNo.79と同じ器形になると考えられる。時期はI-3期

## (3) 古代の土器

古代の土器は量的には少ないが、須恵器甕・皿、土師器皿、瓦器、瓦質羽釜、土師質羽釜、貿易陶磁器などが出土している。時期は9世紀、13世紀を中心とした時期と考えられる。

### 土師器皿

No.91の須恵器と同じ形態で須恵器模倣の土師器皿と考えられる。9世紀代と考えられる。No.86は小皿で12世紀～13世紀ぐらいではないかと考えられる。

### 須恵器壺

古代9世紀～10世紀代の有蓋の壺と考えられる。内面には同心円上のあて具痕が残る。

### 須恵器甕

古代9世紀～10世紀代の甕と考えられる。

### 須恵器坏

9世紀代と考えられる。ハの字状に開く輪高台である

### 須恵器皿

器形的にはNo.90の土師質皿とほとんど同じ形態をしており、9世紀代のものと考えられ、野市町の下ノ坪遺跡で同じ形態・法量のものが出土する。

### 瓦器皿

No.92の1点のみ図示できた。手捏ねによって成形され、底部はやや丸みを帯びた平底になる。

口縁部と体部の境は段状を呈している。内面にはヘラ磨きが施される。

#### 瓦器碗

瓦器碗 3点出土しておりNo.94・No.95は同じ形態のものと考えられる。器高は比較的高く内湾する体部を持つ。高台は低く断面は三角形で退化している。内面にはわずかに並行ヘラミガキ痕が残っている。生産地は不明であるが在地の可能性も考えられる。時期的も不明である。No.93は和泉産の瓦器碗で口縁部は、端部近くで強い横ナデによって外反気味になる。高台はまだしっかりしており、尾上編年Ⅰ－3の時期と考えられる。

#### 土師質羽釜

わずかに上方を向く鐳が付く。

#### 瓦質羽釜

在地の瓦質の羽釜である。

#### 青磁

底部のみが出土している。龍泉窯系の青磁Ⅰ－5類と考えられる。13世紀代と考えられる。

#### 白磁

口禿の皿と考えられる。青磁Ⅰ－5類に伴うと考えられる。

### (4) 木器

木器は残存状況が良好で多量に出土している。出土した木器は大きく、農耕・生産に関わるもの、祭祀に関わるもの、その他の3種類に分けられる。

なかでも農具は多く出土し、その種類も多い。特にナスビ形木製品は完形で2点出土しており、高知県では初めての出土で注目される。また軛（首木）は全国的にも出土例が少なく農耕における牛馬使用を考える上で貴重な資料である。その他では、機織りに関係する部材と考えられるものや筵を編むための木錘が出土している。

No.118は舟形木製品で準構造船を模したのと考えられ、河川祭祀・航海に関する祭祀に使用されたと考えられる。その他祭祀に関すると考えられるものでは乳棒状木製品、用途不明であるが、丁寧な作りのNo.119などが祭祀に関係すると考えられる。

その他、生活に関するものではNo.114の櫛が出土している。幅約10cmの挽齒横櫛で蒲鉾状の形態を呈する。

木器の時期はいずれも古墳時代と考えられるが、農耕・生産に関するものはナスビ形木製品が板状になっていることや、当遺跡では出土していないが軛に伴うと考えられる馬鍬が6世紀後半から出土することを考えるならば6世紀後半から7世紀半ばまでの時期と考えたい。祭祀に関する木器は、出土した初期須恵器が祭祀に使用された可能性が高いことから5世紀半ばと考えたい。

その他では横櫛の時期が注目されるが、遺物の出土量や形態からは古墳時代中期～後期の可能性が考えられる。

## (5) 鉄器

鉄器は鉄鎌が一点のみ出土している。刃部の幅は狭くわずかに曲がっている。古墳時代のものと考えられる。

## (6) 玉類

管玉、ガラス小玉が出土している。管玉は硬玉製で径が小さく古墳時代の管玉と考えられる。ガラス小玉は明るいターコイズブルーの発色をしており銅による発色ではないかと考えられる。

## (7) 石器

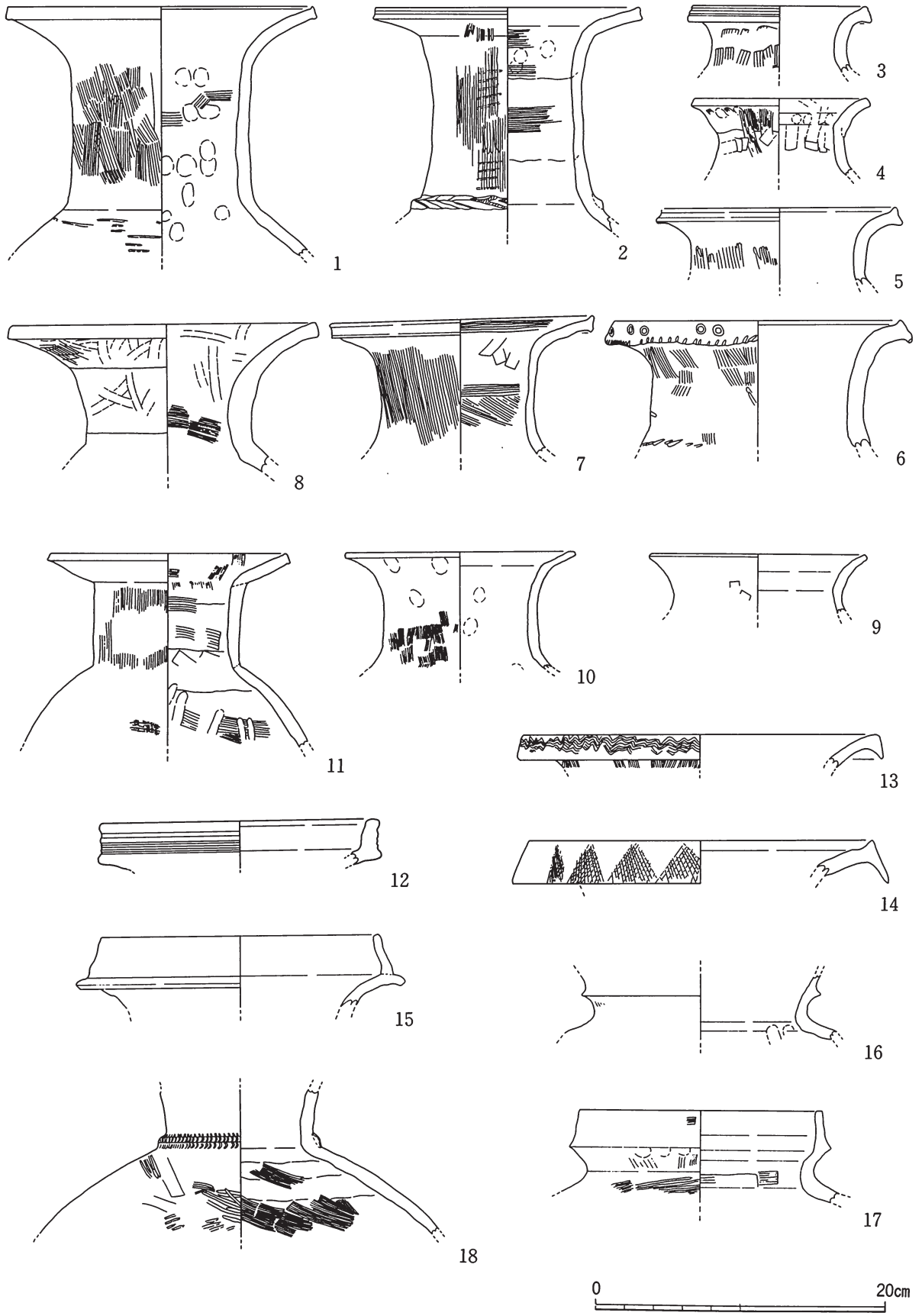
石器では、石包丁、石鏃、石斧未製品、叩き石、砥石、石錘が出土している。石包丁は両端に抉りのはいった打製石包丁が1点出土している。石材は結晶片岩である。弥生時代後期の可能性が高いと考えられる。石鏃は4点出土しているが2つのタイプに分けることができる。No.124、No.125は小型で基部が凹み脚が長い形態で重さも0.6gと0.8gと軽い。形態から縄文時代の石鏃の可能性と考えられる。No.126とNo.127は比較的大型の石鏃で弥生時代後期の石鏃と考えられる。石材はNo.124がチャートである以外はサヌカイトである。その他では、緑色片岩の石斧未製品が1点出土している。石錘と考えられるNo.133は一般的にみられる小判形の砂岩の長辺の両端を打ち欠いたものでなく、厚みのある石の縁辺を溝状にして、そこに紐を結んだと考えられ、一般的な漁撈用とは用途の違う可能性があったと考えられる。

## 参考文献

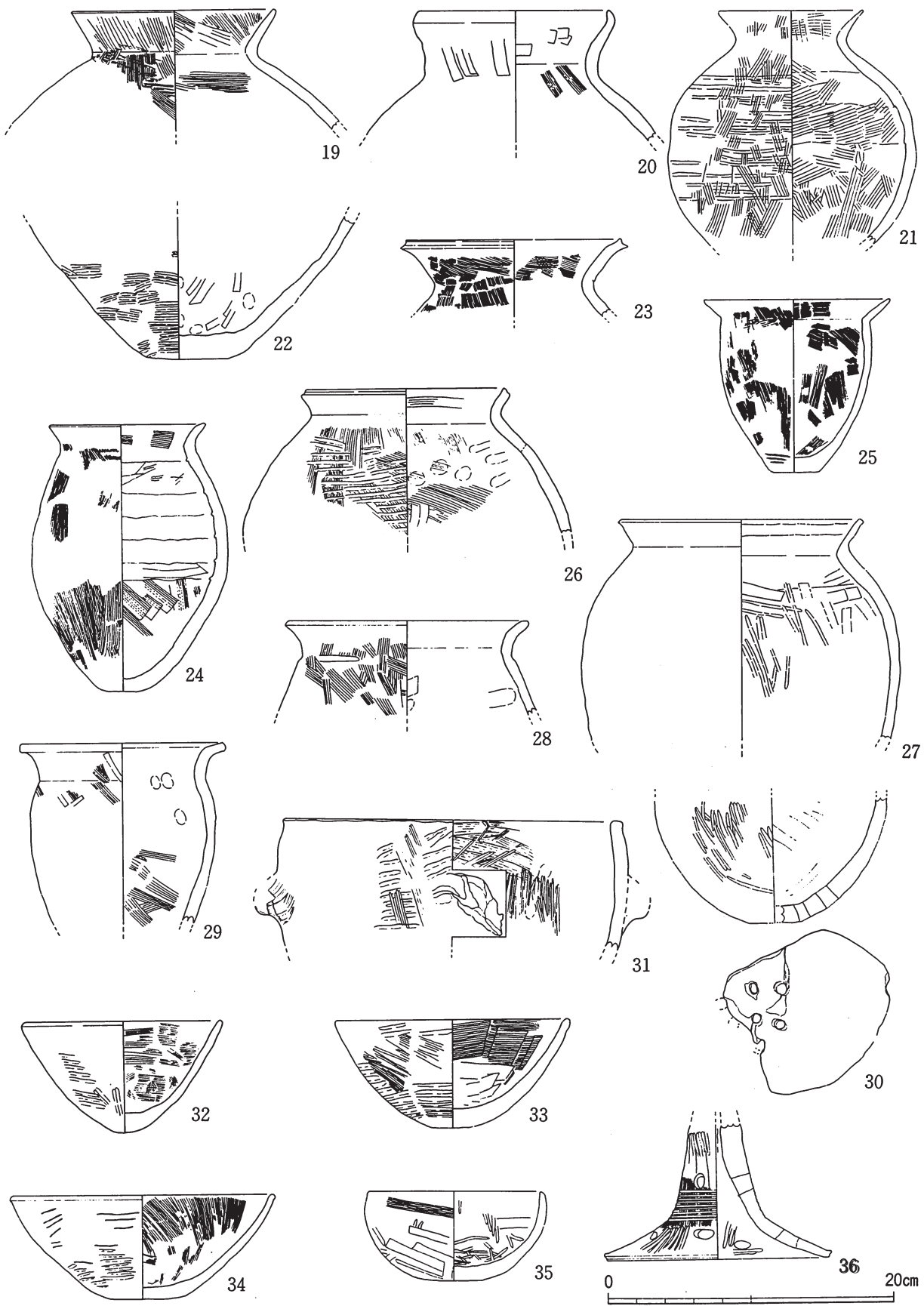
- 大阪府教育委員会 『陶邑Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告書第30 1978年  
田辺昭三 『須恵器大成』1981年  
廣田典夫 『土佐の須恵器』四国考古学論叢2 1991年  
春野町教育委員会 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』 1990年  
尾上 実 「大阪南部の中世土器」—和泉型瓦器碗— 『中近世土器の基礎研究』 1985年  
奈良国立文化財研究所 『木器集成図録』近畿古代編 1985年  
樋上 昇 「耕作のための道具」—ナスビ型農耕具を中心に— 『季刊考古学』47号 1994年  
三重県立斎宮歴史博物館 『平成7年春期企画展図録』 「日本の櫛—別れの御櫛によせて—」 1995年

## SR 1 出土遺物実測図



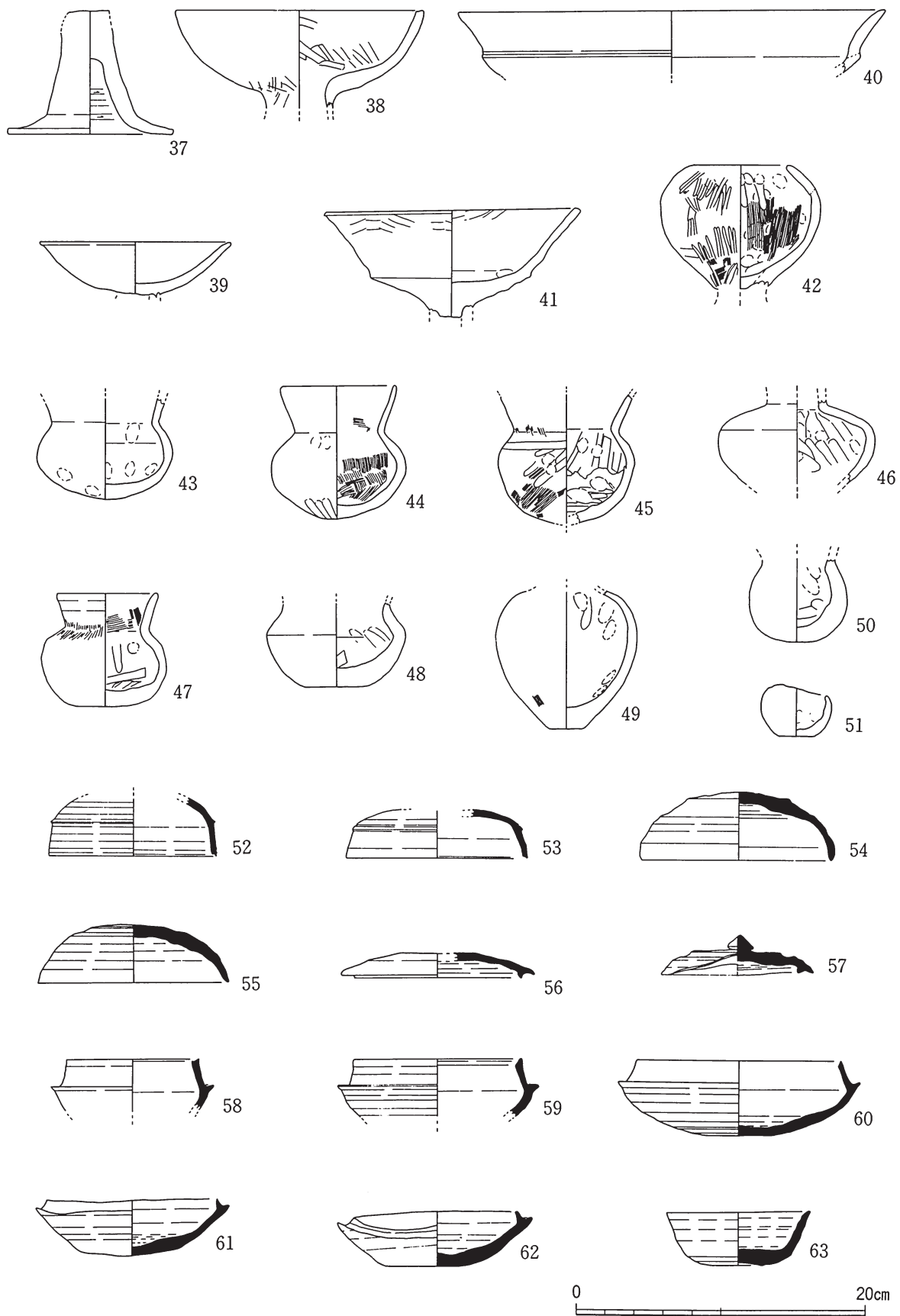


第7图 SR1出土土器

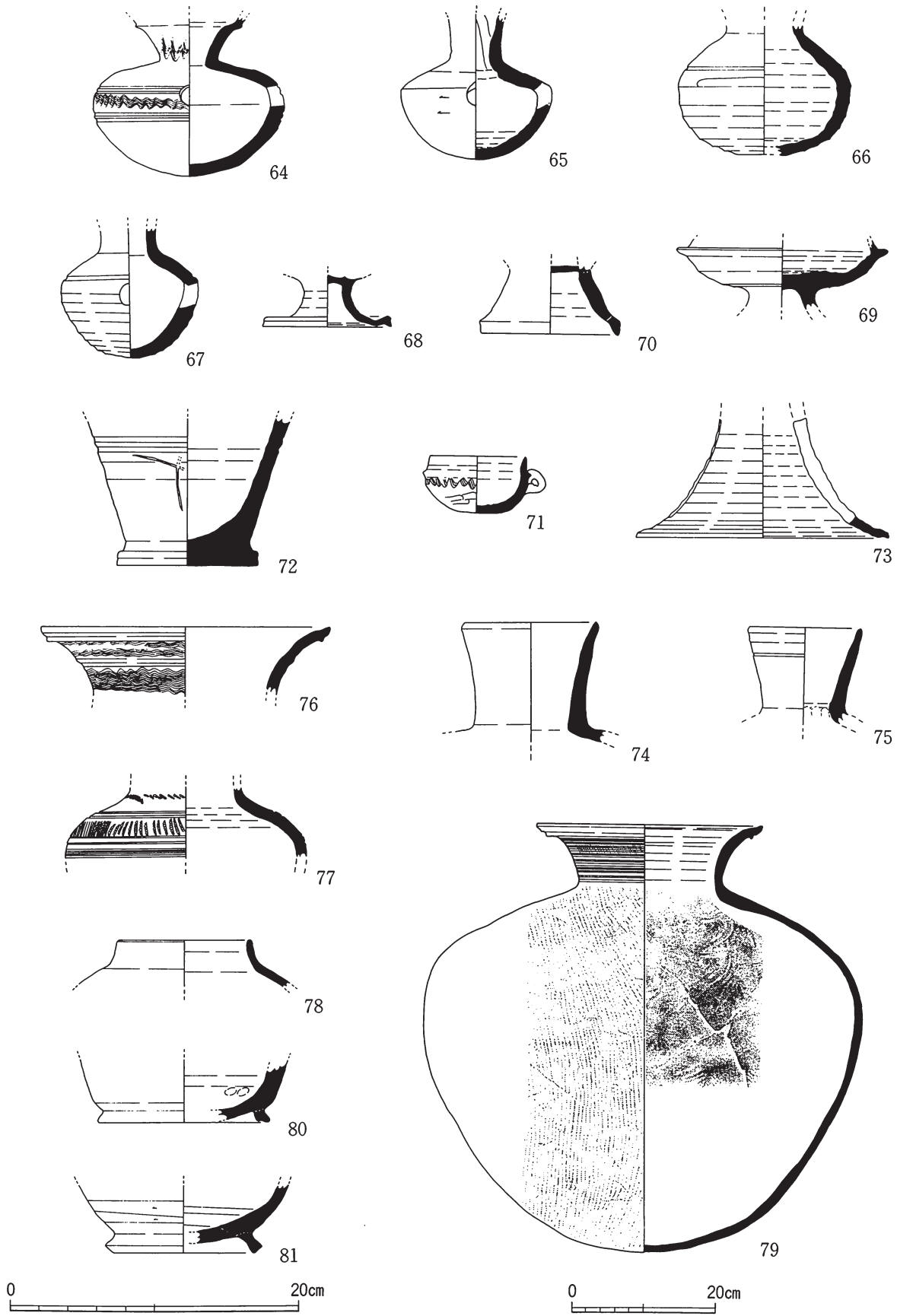


第8图 SR1出土土器

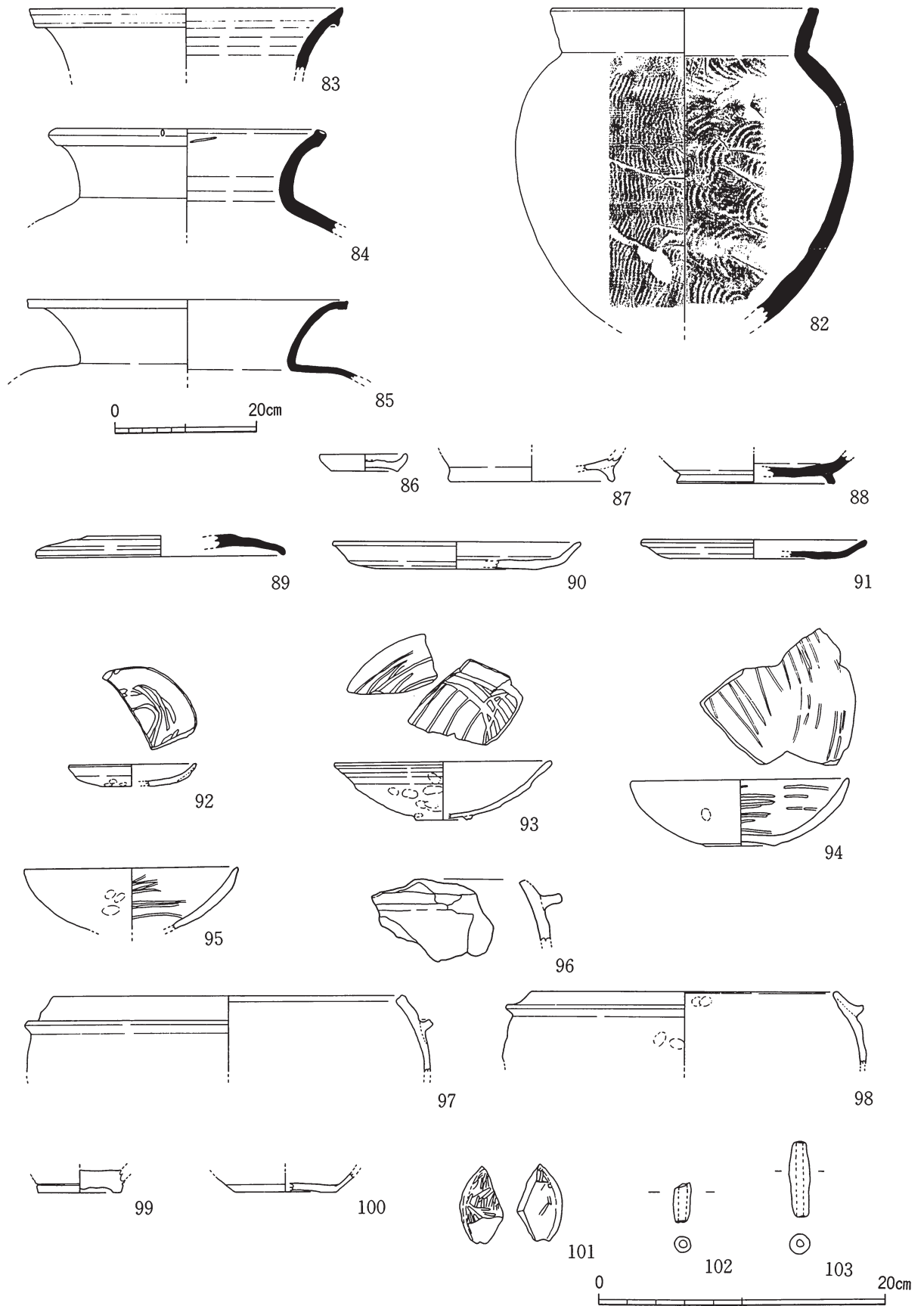




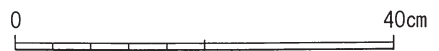
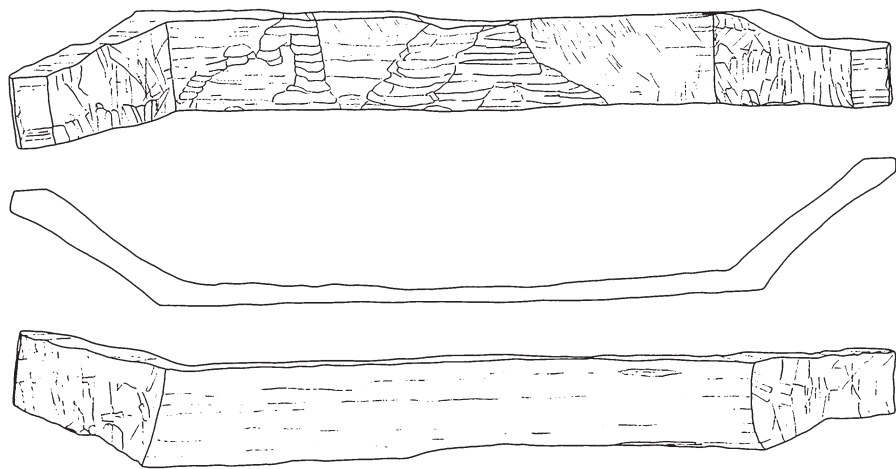
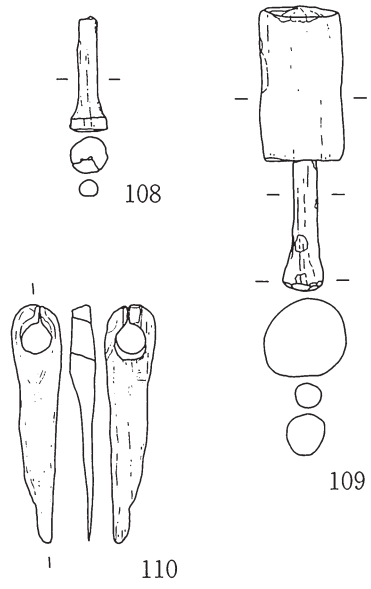
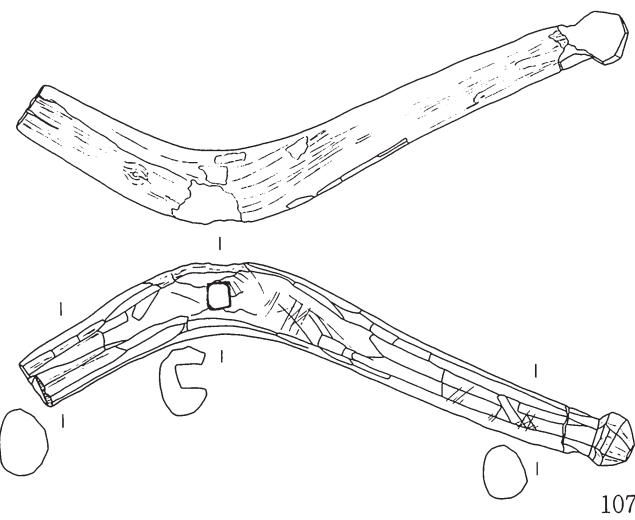
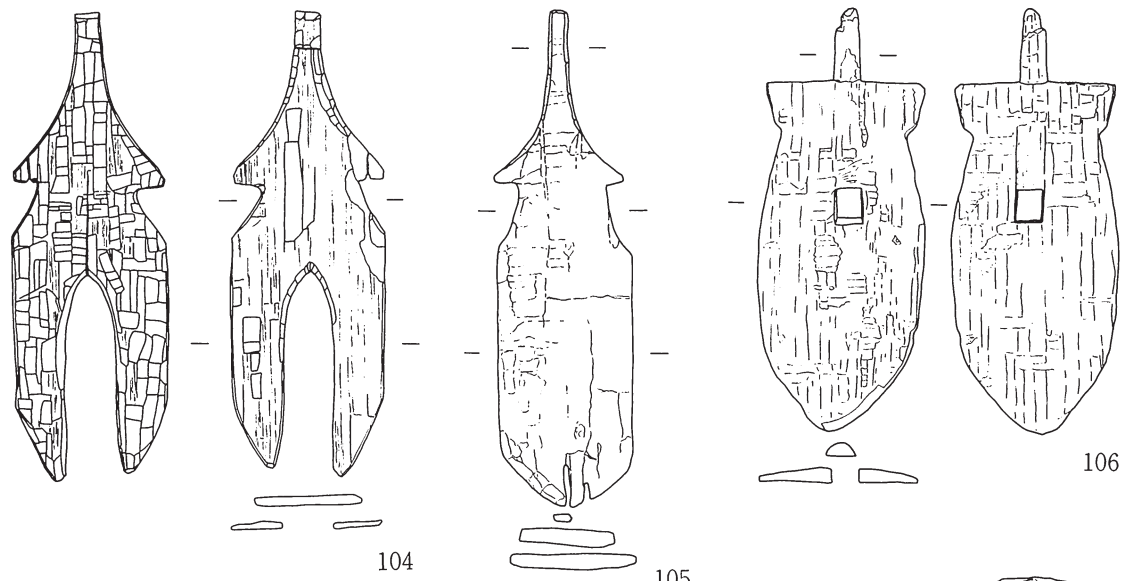
第9图 SR1出土土器



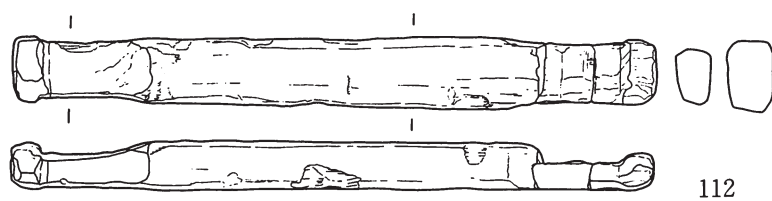
第10图 SR1 出土土器



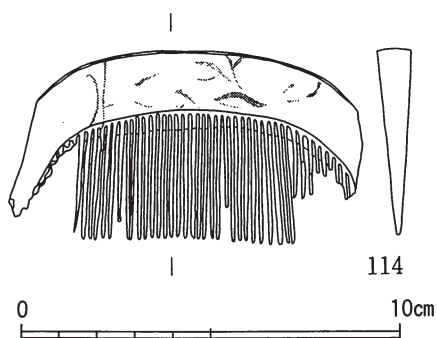
第11圖 SR1 出土土器



第12图 SR1 出土木器



112



114

0 10cm



113



115



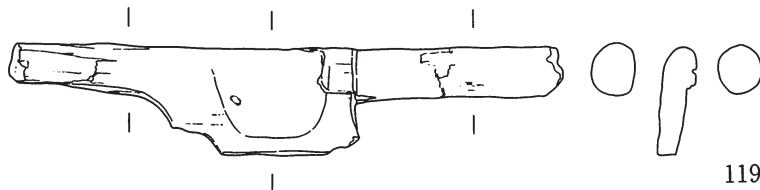
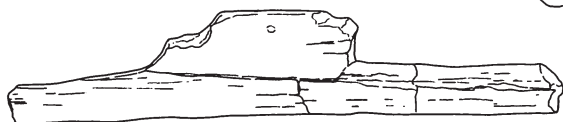
116



117



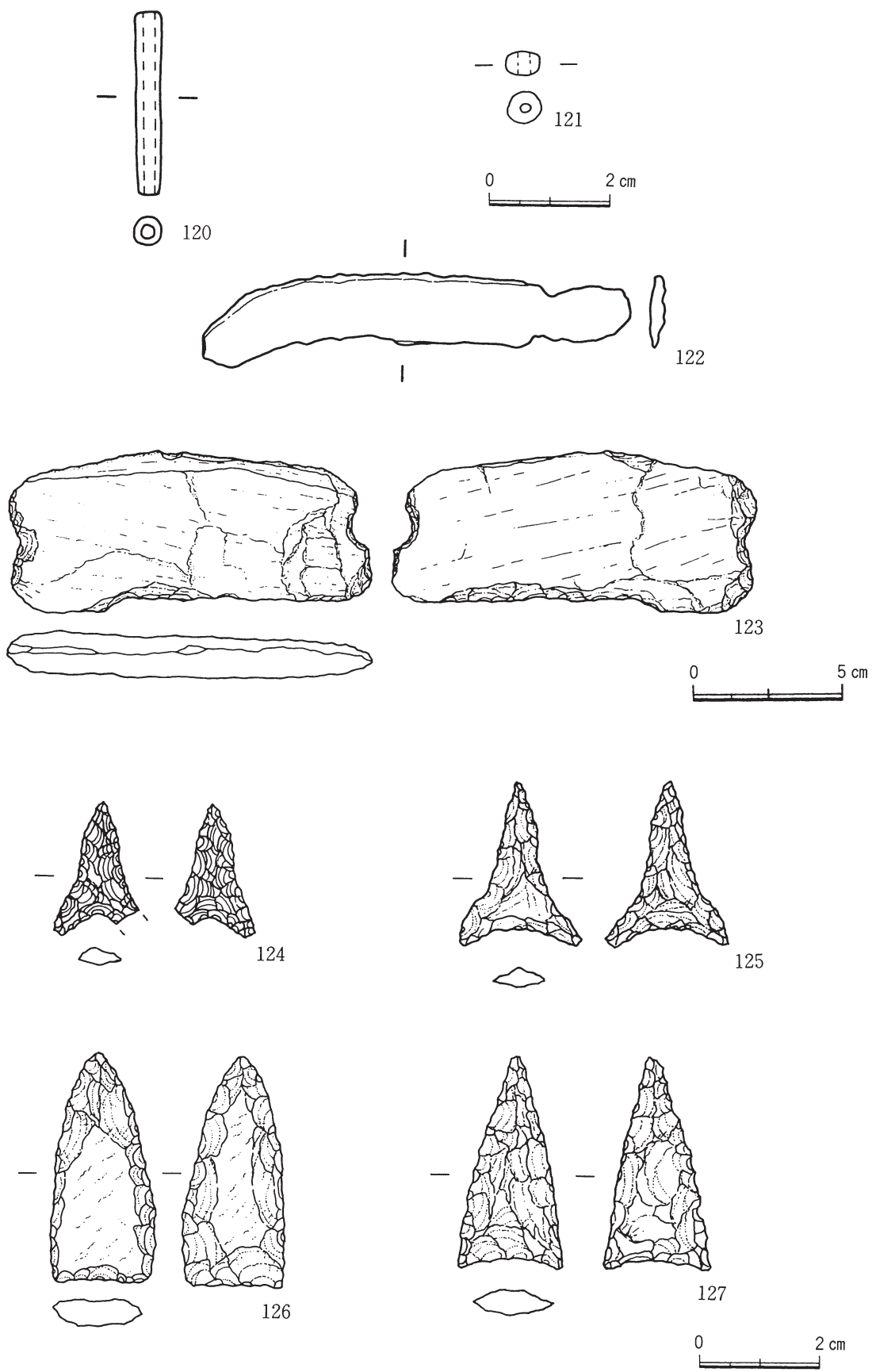
118



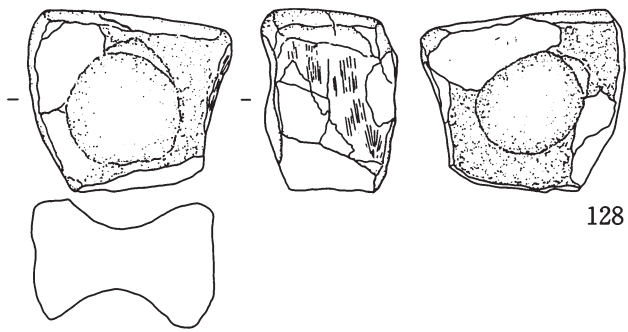
119

0 40cm

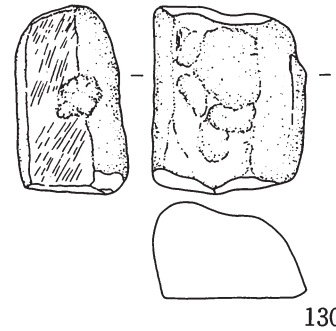
第13図 SR1 出土木器



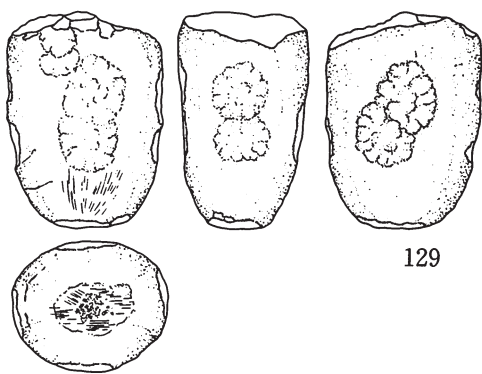
第14図 SR1 出土玉類・鉄器・石器



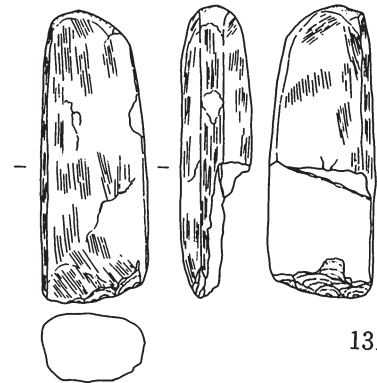
128



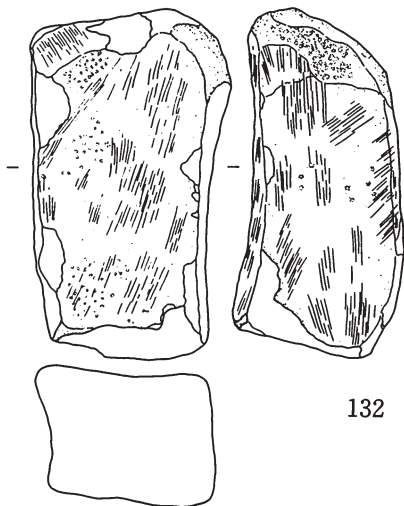
130



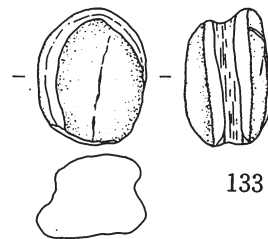
129



131



132



133



第15图 SR1 出土石器

## ま と め

今回の調査で遺構は、溝状遺構、土坑、貝塚状遺構、流路跡が確認されている。

溝状遺構と土坑は弥生時代後期の遺構と考えられるが、その規模も小さく自然遺構と考えられる。弥生時代後期の遺物は流路跡の埋土中からも出土するがその多くが砂礫層上面から流れ込み堆積と考えられる。弥生時代の包含層は調査区南端部で僅かにみられ弥生時代後期の集落は調査区の南に存在した可能性と考えられる。貝塚状遺構は古墳時代遺構と考えられるが規模の小さなもので、集落によるものではないと考えられる。流路跡の埋土中からは木器を含む古墳時代の遺物が多量に出土している。流路跡は、現在の介良川とほぼ並行しており旧介良川の流路であると考えられる。流路跡は古墳時代は緩やかな流れの時期があり植物が繁っておりそれが腐植土層になったと考えられ、中世初頭の遺物包含層は砂質土で小礫が入ることからこの時期に流路が東側に寄り旧流路は陸地化し耕作地になったと考えられる。

出土遺物では特にⅠ－Ⅱ期に比定される初期須恵器が高知県中央部で出土したことが注目される。高知県で初期須恵器が出土した遺跡は、近年まで高知県西部地域の中村市周辺の遺跡に限られていた。中でも中筋川の自然堤防上に立地する河川祭祀遺跡として知られる具同中山遺跡群からは量的にも多く出土している。しかし、近年の調査の進展によって、中央部でも出土が確認されはじめ、特に仁淀川の微高地に立地する神母谷遺跡からはⅠ－Ⅰ期の甕が出土している。

介良遺跡が所在する介良地区は、高須地域を挟んで浦戸湾東岸に位置しているが、高須地域は、江戸時代に入って新田化された新田村でありそれ以前は浦戸湾がかなり東まで入っていたと考えられている。介良遺跡の貝塚状遺構からは海洋性の貝類や汽水域に生息する魚類の骨が出土しており介良地区は浦戸湾に隣接していたと考えられ古墳時代は浦戸湾のウォーターフロントであった。このような立地条件を持つ介良遺跡から初期須恵器が出土したことは、初期須恵器が出土する遺跡は河川の河口部に隣接し海に通じている共通点を想定させ、初期須恵器の受容のあり方を考える上で貴重な資料になった。

初期須恵器は、高知県では前期古墳を始め古墳が絶対的に少ないため古墳からの出土例がなく、具同中山遺跡群をはじめ多くが河川祭祀に関わる遺跡からの出土であり、今回介良遺跡からほぼ完形で出土した大甕も舟形木製品などの祭祀具の出土と併せて考えるならば、河川祭祀と密接に関わるものと考えられる。初期須恵器使用を考えるうえでも貴重な資料を提供することになった。

また、今回の調査では、木器も良好な状態で出土し、特に、農具が多く出土している。ナスビ形農具は高知県では出土例が少なかったが、今回、又鋏、平鋏の両方が出土している。両方とも板状で薄い作りとなっており、畿内色の強いものと考えられる。また軛（首木）も出土しており、高知県では初めての出土である。軛は牛馬が農耕に使用されていたことを証明しており、非常に貴重な資料となっている。その他では機織り具の部材と考えられる部材が出土している。これらの生産に関わる木器は6世紀後半から7世紀にかけての時期と考えられる。

これらは古墳時代中期から後期にかけて生産に関わる新技術の導入があったことをうかがわせ、介良では古墳時代には、須恵器の導入、農具における鉄使用などの全国的な流れの影響を受けるだ



けの社会的基盤が確立していたと考えられる。

今回の報告は、概要報告であり、全ての遺物について詳細な観察ができていなく緊急を要するものみの報告となり、遺物についても偏ったものになり、介良遺跡の全体の姿を反映したものにできなかったが、介良遺跡は浦戸湾のウォーターフロントに位置し、弥生時代前期に集落を営みはじめ、中期末から後期に盛期を迎え、古墳時代に入っても順調に社会発展し、後の介良庄に続く基盤が形成されていたと考えられるなど、介良遺跡及び介良地区の概観はできたのではなかろうか。介良遺跡は今後も発掘調査が予定されており、より全体像が浮かび上がってくることが期待される。

#### 参考文献

植野浩三「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序―須恵器生産の展開を中心として―」『文化財学論集』1994年

高知県教育委員会（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター「具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1992・3年

高知市教育委員会『介良』高知市文化財調査報告書第9集 1989年

第2表 木器樹種鑑定表

実測番号・木器番号	器 種	樹 種
No. 104	ナスビ形木製農具	ブナ科アカガシ亜属
No. 105	ナスビ形木製農機	ヤブコウジ科タイミンチバナ
No. 106	鋤	ブナ科アカガシ亜属
No. 109	横槌	ツバキ科ツバキ属
No. 111	槽	スギ科スギ
No. 112	機織り具部材	ブナ科アカガシ亜属
No. 113	部材	ヒノキ科ヒノキ属
No. 114	櫛	ツゲ科ツゲ属
No. 115	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
No. 116	不明	スギ科スギ
No. 117	乳棒状木製品	ヤブコウジ科タイミンチバナ
No. 118	舟形木製品	ヒノキ科ヒノキ属
No. 119	不明	ツバキ科ツバキ属
No. 22	竪杵	ユズリハ科ユズリハ属
木器 No. 1	竪杵	ツバキ科サカキ属
木器 No. 2	ナスビ形木製農具	ブナ科アカガシ亜属
木器 No. 3	ナスビ形木製農具	ブナ科アカガシ亜属
木器 No. 4	鋏	ブナ科クリ
木器 No. 5	袋状鉄斧柄	ツバキ科サカキ属
木器 No. 6	木錘	ツバキ科ツバキ属
木器 No. 7	木錘	ツバキ科ツバキ属
木器 No. 8	横槌	ツバキ科ツバキ属
木器 No. 9	横槌	ツバキ科ツバキ属
木器 No. 10	曲物	ヒノキ科ヒノキ属
木器 No. 11	曲物	ヒノキ科アスナロ属
木器 No. 12	曲物	ヒノキ科アスナロ属
木器 No. 13	不明	スギ科スギ
木器 No. 14	不明	ブナ科シイ属
木器 No. 15	乳棒状木製品	ツツジ科シャシャンボ
木器 No. 16	不明	クスノキ科クスノキ属
木器 No. 17	不明	ツツジ科シャシャンボ
木器 No. 18	部材	ブナ科アカガシ亜属
木器 No. 19	部材	アワブキ科アワブキ属
木器 No. 20	板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属
木器 No. 21	不明	ブナ科アカガシ亜属

# 觀 察 表



挿図 番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
1	SD 1	壺	17.85 (4.3) — —	二重口縁、壺の口縁部分。接合部分でとれており灰色にやけている。口縁外面波状クシ描文。	外面横方向左上がり縦方向にハケ目後ナデ。砂粒が少なく胎土が比較的精製されている。	
2	〃	甕	15.4 (3.45) — —	くの字状に屈曲し、やや外反する。	口縁内面左上がりのハケ目。体部は横方向のタタキ目が残る。口縁端部をつまみ出し、指頭圧痕が残る。	
3	〃	〃	16.05 (9.1) — —	口縁部は強く屈曲し、ほぼ水平に開く。口縁端部は上下に拡張され凹面をなす。	外面口縁部下まで横ナデ胴部にはハケ目が残る。内面口縁部下まで、ヘラ削り。	
4	〃	〃	— — — —	突帯部にはっきりしたきざみ目。	外面ナデ調整。縦方向のハケ目。	
5	〃	〃	11.7 (5.3) — —	くの字形に屈曲。器壁が薄くチャートの粗粒砂を含む。	胴部タタキ目。口縁部タタキ出し。胴部内面横方向にハケ調整の後縦方向にもハケ目。	胴部から口縁にかけて多量のスス附着
6	〃	〃	21.6 (18.6) 13.2 —	くの字状に屈曲する口縁。口縁端部は面をなす。	外面は口縁部下までハケ調整。口縁端部にもハケ調整は施される。胴部には、荒いタタキ痕が残る。内面口縁部までハケ調整。かたく焼きしめる。	
7	〃	〃	15.8 (7.3) — —	口縁部は屈曲して開き短部は面をなす。口縁部はやや肥厚きみ頸部の径は広く上胴部に最大径を持つ。	外面にタタキ調整後、ハケ調整。	ススが附着する
8	〃	〃	16.0 (7.5) — —	くの字形に屈曲した口縁。	体部タタキのあと縦方向のハケ調整。口縁はハケ調整後ナデ内面は体部ナデ、口縁は横方向のハケ目。	口縁外面にスス附着
9	〃	〃	18.2 (9.7) — —	細かいチャート砂粒が混じる。頸部の屈曲が緩やか。口縁部はやや厚く端部はナデによりまるみをおびる。	内外面ともにナデ調整。口縁部外面は強い横ナデ。	外面全面に多量のスス附着搬入品と考えられる
10	〃	〃	13.0 (8.8) — —	くの字形に屈曲。	外面全面タタキ目。内面横方向のハケ目。	スス附着
11	〃	〃	8.8 (8.4) — —	ほぼ上方に開く口縁部、端部は、丸く収める。	外面ハケ調整。	
12	〃	〃	— — (5.85) 3.2	小さい平底で底部より直線的に立ち上がる。内外面の焼きの温度差により、内面黒、外面灰黄色。	タタキの後、縦方向のハケ目調整。	
13	〃	〃	— (6.1) — 5.4	底部平底。	外面縦方向のあらいハケ目が底部まで続く。	
14	〃	〃	— (14.0) — 4.2	小さな径の底部から立ち上がる。	外面長い単位のハケ調整。内面指頭押圧後ハケ調整。	
15	〃	須恵器 杯蓋	13.4 3.0 — —	焼成時のゆがみが、やや低く平坦な天井を持つ。	天井部上面回転ヘラ切り未調整。	
16	貝塚状遺構 1	須恵器 杯	口径 12.7 たち上り高0.8 受部径15.2 器高 3.2 底径 8.0	器高は低く全体に扁平。立ち上がりは、短くわずかに内傾する。	底部ヘラ切り未調整。上半回転ナデ。	
17	〃	須恵器 甕	19.4 (7.5) — —	斜め上方に開く口縁部で、2条の沈線が走る。断面三角形の貼付凸帯が施され、その間に波状文が入る。	内面に強い回転ナデ。	全体に黒っぽい灰色で、断面は赤い発色を呈する

第4表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			全長	全幅	全厚		
18	SD1	鏡	(3.4)	—	(0.27)	(6.9)	内行花文鏡 銘帯の一部残存
19	貝塚状遺構1	銀環	2.6	—	0.42	8.9	
20	〃	土小製玉	0.75	0.80	0.85	0.4	
21	〃	石臼製玉	0.4	0.35	0.45	—	
22	〃	木堅製品杵	45.4	7.1	5.5	—	

第5表 SR1 出土遺物観察表 (土器)

挿図 番号	区名	層名	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	Ⅲ	Ⅶ層	壺	20.1 (17.2)	— —	長く直立する頸部から大きく開く口縁部、口縁端部は面をなす。	頸部内面指頭押圧後、ハケ調整外面口縁部横ナデ。頸部縦方向ハケ調整。	
2	Ⅲ	Ⅺ層	〃	18.2 (15.5)	— —	直立する頸部から大きく開く口縁部、端部は面をなす。頸部下には断面三角形の粘土帯が貼付られ羽状の刻目が施される。	内面にハケ目が残る。外面には口縁端部下まで縦方向のハケ調整。	
3	Ⅲ	Ⅸ層	〃	12.0 (4.5)	— —	外反してなめらかに開く口縁部。口縁端部は上下に拡張され2条の凹線が施される。	内面横ナデ。外面口縁下までハケ調整。	
4	Ⅱ	Ⅶ層下	〃	11.8 (5.2)	— —	短くなめらかに開く口縁部端部は面をなす。貼付口縁。	外面口縁下に指頭圧痕が残る。内面の粘土接合部に指頭押圧後ハケ調整。	
5	Ⅰ	Ⅶ層	〃	15.8 (5.3)	— —	直立する頸部から大きく開く口縁部。口縁端部は上下に拡張されわずかに2条の凹線がみられる。	内面横ナデ、外面口縁部横ナデ頸部は荒いハケ調整。	
6	Ⅰ	Ⅶ層	〃	19.6 (8.8)	— —	直立する頸部から大きく開く口縁部、端部は上下に拡張され面をなし竹管による刺突文が施され下部には刻目が入る。頸部下にはヘラによる横方向の刺突が施される。	口縁部内面横ナデ、頸部外面ハケ調整。	
7	Ⅱ	Ⅶ層	〃	17.9 (9.3)	— —	直立する長い頸部から大きく開く口縁部、端部は上下に拡張され凹面をなす。	口縁部内外面とも横ナデ。頸部外面縦方向のハケ調整。	
8	Ⅱ	Ⅶ層下	〃	20.9 (10.3)	— —	直立する長い頸部から大きく開く口縁部、端部は面をなす。	わずかに内外面ともハケ目痕が残る。	
9	Ⅰ	Ⅵ層	〃	14.6 (4.1)	— —	短かく開く口縁部、端部は丸く収める。	内外面とも磨耗のため不明	
10	Ⅱ	Ⅶ層	〃	15.4 (8.2)	— —	直立した頸部から大きく開く口縁部、端部はわずかに面をなす。	口縁外面に指頭による押圧後、胎土は精選された粘土に2～3mm大の砂粒が入る。	
11	Ⅲ	Ⅶ層	〃	16.2 (13.0)	— —	直立する頸部から強く屈曲し大きく開く口縁部、口縁端部は面をなす。	内外面ともハケ目が残る。	
12	Ⅰ	Ⅵ層	〃	18.9 (3.1)	— —	二重口縁状の口縁、口縁外面には凹線状の沈線が巡る。		
13	Ⅰ	Ⅵ層	〃	24.7 (2.3)	— —	大きく開く口縁部端部は下方に拡張され面をなし波状文が施される。	口縁端部下よりハケ目調整。	
14	Ⅰ	Ⅵ層	〃	23.6 (2.9)	— —	大きく開く口縁部端部は下に向かって大きく垂れ面をなし斜格子文が施される。	内外面とも磨耗のため不明。	
15	Ⅰ	Ⅵ層	〃	19.0 (5.0)	— —	断面方形の稜から内傾する口縁部。	不明。稜の部分で口縁部を接合。	
16	Ⅰ	Ⅵ層	〃	— (4.0)	— —	稜をもつ二重口縁の壺。	口縁部と胴部の接合部に指頭圧痕が残る。	
17	Ⅰ	Ⅵ層	〃	16.6 (6.3)	— —	胴部から短かく開いたのち稜を持って強く屈曲し、上方にのびる二重口縁を呈する。	口縁部下にはタタキ痕が残る。	
18	Ⅱ	Ⅵ層	〃	— (10.1)	— —	頸部のつけねに断面方形の粘土帯を貼付。ノの字状の刻目をその上下と先端部に施す。	内面に粘土紐の接合痕が残る。内面ハケ調整。	
19	Ⅱ	Ⅶ層	〃	14.0 (8.3)	— —	短かく直線的に斜め上方に開く口縁部。胴部は球形をなすと考えられる。	口縁部、胴部外面荒いハケ調整、外面タタキ調整の後ハケ調整。	

第6表 SR1 出土遺物観察表 (土器)

挿図番号	区名	層名	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
20	II	VI層	壺	13.1 (9.0) — —	口縁端部は面をなし、わずかに内傾する。	内外面とも磨耗のため不明だがわずかにハケ目痕が残る。	
21	II	トレンチ	〃	10.2 (16.4) — —	短かく開く口縁部、球形の胴部を持つ。	輪づみによって成形、外面タタキの後ハケ調整、内面に荒いハケ調整が残る。	
22	II	VII層	〃	— (10.0) — 4.0	平底の底部から立ち上がる。	内面にハケ目が残る外面はタタキ調整。	
23	II	カクラン	〃	14.3 (5.4) — —	短かく開く口縁部、端部は下方に拡張され凹面をなす。	口縁部横ナデ調整、頸部内外面ともハケ調整。	
24	II	トレンチ	甕	10.6 18.7 13.6 2.8	小さな平底を持つ、最大径は胴部中央よりやや下に位置する。口縁は短かく開き端部は丸く収める。	輪づみによって成形。下半はハケによって調整されるが上半は未調整、外面口縁部からハケ調整、底部内面には強い指頭圧痕が残る。	
25	II	VII層	〃	12.9 12.0 10.4 3.2	小さな平底の底部から立ち上がる。最大径は上胴部に位置する。	外面口縁部でタタキ、その後丁寧ハケ調整、内面ハケ調整。	
26	II	VI層	〃	13.8 (10.4) — —	短かい口縁部、端部は凹面をなす。	内面指頭押圧の後、ハケ調整。外面タタキの後、ハケ調整。	
27	II	VI層	〃	16.5 (15.4) 22.0 —	直線的に短かく開く口縁部、胴部最大径は上胴部に位置する。	口縁部外面横ナデ、内面にハケ目が残る。	
28	I	VI層	〃	16.4 (6.6) — —	短かく屈曲して開く口縁部、端部は丸く収める。	口縁部内面横方向ナデ調整、外面口縁部横ナデ後端部下までハケ調整。	
29	II	VII層	〃	14.0 (12.7) 12.8 —	短かなめらかに開く口縁部端部は面をなす。内面胴部下側にハケが残る。		外面にはススがほぼ全面に付着
30	III	VII層	甌	— (8.6) — —	丸底から立ち上がる。底部には円孔が穿孔される。	内面にハケ目が残る。	
31	II	VII層	〃	23.5 (8.9) — —	口縁端部は上方を向き、面をなす。半円形の鋸状の把手が付く。	外面にはタタキ痕が残る。	
32	II	VII層	鉢	13.7 7.8 — 1.6	わずかに残る小さな平底、底部から直線的に開く体部。口径に比して器高は高め。	外面は磨耗のため、わずかにタタキ痕が残る。内面、底部付近以外は横方向にハケ調整。	
33	II	VII層	〃	16.5 7.5 — 2.8	わずかに残る平底の底部から内湾ぎみに立ち上がる。	外面全面にタタキ後、上半分はハケ目調整、下半はタタキが残る。内面は全面ハケ目。	
34	II	VII層	〃	18.0 7.2 — 4.0	小さな平底の底部から内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	外面底部までタタキ、内面ハケ調整。	
35	III	VII層	〃	11.9 6.3 — 4.0	丸底の底部から内湾して立ち上がる。口縁端部は上方を向き丸く収める。	内面口縁部横方向はナデ、わずかにヘラ磨きが残る。外面底部には押圧痕が残る。ヘラによる不定方向のハケ目が残る。	
36	II	VII層	高坏	— (9.5) — 19.6	脚部には3ヶ所に円孔が施され、円孔下に9条の沈線が巡る。裾部は大きく開き6ヶ所に脚部の円孔と同じ大きさの円孔が施されると考えられる。裾端部はわずかに面をなす。	分割成形。内面にはしほり目が残る。外面は細かなハケ目が残る。	
37	III	VII層	〃	— (8.5) — 11.2	細い脚部から屈曲し短かく大きく開く裾部、裾端部はわずかに面をなす。	分割成形。	
38	III	VII層	〃	17.0 (6.7) — —	内湾して立ち上がる坏部、口縁端部は面をなし上方を向く。坏下部にはヘラによる刻目がみられる。	口縁部横ナデ、内面見込放射状の斜め方向のナデ。	



第7表 SR1 出土遺物観察表（土器）

挿図 番号	区名	層名	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
39	Ⅲ	XI	高坏	— —	13.0 (3.6) —	浅い椀状の坏部。	内外面とも横ナデ。	
40	I	Ⅶ層	〃	— —	29.0 (4.3) —	坏部から稜を持って外反する口縁部、端部は丸く収める。	坏部と口縁部の接合部に強い横ナデ。	
41	Ⅲ	Ⅶ層	〃	— —	17.5 (7.4) —	稜を持ち屈曲し外反して開く口縁部、端部は横ナデによって仕上げ面をなす。	内面見込み中心から反時計まわりに放射線状にナデ、口縁部内外面とも横ナデ。	
42	Ⅱ	Ⅵ層	〃	— —	6.5 (8.4) —	球形を呈する坏部。	内面ナデ調整。	
43	I	Ⅵ層	小型 丸底壺	— —	— (7.0) —	丸底で胴部中央部に最大径を持つ丸みの強い胴部を持つ口縁は直立して斜め上方にのびる。	内面に指頭圧痕が残る。外面指頭押圧の後、横方向のハケ調整、	
44	I'	Ⅶ層	〃	— —	7.7 9.2 —	丸底の底部から立ち上がる最大径胴部中央に位置する。直立して斜め上方に開く口縁部。	外面口縁部横ナデ、上胴部に指頭圧痕が残る。底部縦方向のナデ。内面胴部下半、棒状工具によるハケ目痕がある。	
45	Ⅲ	Ⅸ層	〃	— —	— (8.8) —	最大径は上胴部に位置する。口縁部は直線的に斜め上方に開く。	内面口縁部下縦方向のハケ調整、外面最大径より下部斜め下方を中心としたハケ調整。	
46	I	Ⅵ層	〃	— —	— (5.8) —	最大径は上胴部に位置し、やや肩のはった形となる。	内面に指頭による押圧、ナデがみられる。	
47	Ⅲ	XI層	〃	— —	6.8 7.7 — 3.5	平底の底部から立ち上がる、やや扁平な球形の胴部、口縁部は直線的に斜め上方に開く。	内面底部からの立ち上がり部に強いヘラによる圧痕が残る。口縁部斜め方向のハケ調整。	
48	I	—	〃	— —	— (5.8) 7.0 4.0	平底の底部から立ち上がる最大径は胴部中央に位置し、やや算盤玉形を呈する。	内面に斜め方向のナデ痕が残る。	
49	Ⅱ	Ⅶ層下	ミニチュア 壺	— —	— (9.5) — 2.2	上胴部に最大径を持ち小さな底部を有する。	底部内面にわずかに指頭圧痕が残るがナデによって調整される。外面ナデ、わずかにハケ目が残る。	
50	I	Ⅷ	手捏土器	— —	— (5.7) —	丸底の底部が内湾して立ち上がる。全体に丸い。	内面底部から胴部下半まで横方向のラセン状の横ナデ痕が残る。	
51	I	Ⅶ層	〃	— —	3.2 3.5 — 2.2	平底から内湾して立ち上がる。	手捏、内面に指頭圧痕が残る。	
52	I	Ⅵ層	須恵器 蓋	— —	11.4 (4.0) — —	天井部は丸味をおび、短い稜によって口縁部と分けられる。口縁端部は内傾する面をなし段を有する。	口縁部内外面とも回転ナデ、天井部外面2/3ヘラ切り。内面回転ナデ。	
53	Ⅲ	—	〃	— —	13.0 4.0 — —	丸い天井部から、ゆるやかに下方に下り全体的に丸味を帯る。	天井部に荒いヘラ削りが残る。内外面とも回転ナデ痕が残る。	
54	I	Ⅵ層	〃	— —	13.2 4.5 — —	やや平坦な天井部から、ゆるやかに下る。全体的に丸味を帯る。稜の痕跡は残らない。	天井部ヘラ切り未調整。口縁部は回転ナデ。	
55	I	Ⅵ層	〃	— —	13.0 4.0 — —	丸い天井部から、ゆるやかに下方に下る。全体的に丸味を帯る。	天井部に荒いヘラ切り痕が残る。内外面とも回転ナデ痕が残る。	
56	I	V層	〃	— —	11.6 (1.8) — —	丸い天井部からゆるやかに下る。内面にかえりがつく。	内外面とも回転ナデ。	
57	I	Ⅵ層	〃	— —	10.3 2.7 — つまみ径2.0 —	平坦な天井部に断面ひし形の宝珠形のつまみが付く。内面にはかえりがみられる。	天井部にはヘラ切り痕が残る。内外面とも回転ナデ。	

第8表 SR1 出土遺物観察表 (土器)

挿図 番号	区名	層名	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
58	I	VI層	須恵器 坏	— — —	9.0 (3.6)	口縁部は比較的長く口縁端部は内傾する面をなし、わずかに段になる。器形は小さい。	内外面とも回転ナデ。	
59	I	VI層	々	— — —	11.4 (3.9)	比較的長い内傾した口縁の立ち上がりを持ち、端部は段を有する。受け部は短かくほぼ水平である。	外面下半は削り、内面は回転ナデが残る。	
60	III	IX層	々	— — —	14.0 5.1	大型の坏。受け部の立ち上がりは長めで口縁端部は内傾し、わずかに段をなす。	内面回転ナデ調整。外面体部下2/3ヘラ削り。	
61	I	VI層	々	— — —	11.7 4.3	器高は低く扁平、底部は平底ぎみ立ち上がりは短い。	内面底部に粘土紐、マキ上げ痕が残る。底部横方向のナデ。体部内外面とも回転ナデ調整、底部ヘラ切り。	
62	I	VI層	々	— — —	11.1 3.8 5.0	器高は低く全体に扁平、立ち上がりは短かく、わずかに内傾する。	内外面とも回転ナデ痕が残る。底部外面はヘラ切り未調整。	
63	I	V層	々	— — —	9.8 4.2 5.2	平底の底部から上方に直線的に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り、底部近くにわずかにヘラ削りがみられる。	
64	III	IX層	甗	— — —	(11.0)	口縁部は細い基部から外反し、さらに段をなして屈曲して開く。基部近くには波状文が施される。胴部の最大径は上胴部に位置し、やや肩のはった形を呈する。ほぼ最大径に位置する場所に円孔が穿孔される。胴部にも、波状文が施され、この上下に回転力を利用してないと考えられる弱い沈線が巡る。	底部外面タタキ痕がわずかに残る。不定方向のヘラ削り。	
65	I	V層	々	— — —	(9.9)	細い頸部を持ち胴部は小さく最大径は上胴部に位置しやや肩がはったような形を呈する。	上胴部はナデ調整が行われるが下胴部はヘラ削り後未調整。頸部内面にはしぼりの痕跡が残る。	
66	I	V層	々	— — —	(9.0) 3.2	胴部中央よりやや上に最大径を有する。肩部に一条の沈線が施される。	外面ヘラ削り。	
67	I	VI層	々	— — —	(9.1)	上胴部に最大径を持つ球形の体部、頸部の基部は細い。最大径のやや下に円孔が穿孔され、その上に一条の沈線が施される。	外面上胴部回転ナデ、下半回転ヘラ削り。	
68	I	V層	高坏	— — —	(3.6) 8.6	短かく比較的太い基部から大きく開く。	内外面ともに回転ナデ痕が残る。	
69	I	V層	々	— — —	12.6 (4.0)	浅い杯部を持つ。杯部の口縁部は短かく上方を向く。	内外面とも回転ナデ。	
70	I	V層	々	— — —	(4.7) 9.4	比較的短かく八の字状に開く脚部端部は、ほぼ直立した面をなす。直方形の透かしが入ったとみられる。	内外面とも回転ナデ。	
71	III	IX層	埴	— — —	6.5 3.9	小型の埴で把手を受け部から下に貼り付ける。受け部下には雑な波状文が巡る。	内面回転ナデ調整、外面下半タタキの後、横方向を中心とした不定方向の静止ヘラ削り。	
72	I	VI層	播鉢	— — —	(10.2) 9.6	平底で体部よりはみ出した底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。外面には2条の沈線が巡る。ヘラ記号と思われるヘラ痕あり。	内外面とも回転ナデ調整。	
73	I	VI層	高坏	— — —	(7.5) 17.6	大きく開く裾部、端部はわずかに折り曲げられ面をなす。長方形の透かしが3個一対で2段になると思われる。	内外面とも回転ナデ調整。	
74	I	V層	壺	— — —	9.0 (8.3)	わずかに外反してのびる口縁部。	内外面とも回転ナデ。	
75	I	V層	提瓶	— — —	7.6 (6.7)	直線的に斜め上方にのびる口縁部端部は丸く収める。	内外面回転ナデ、口縁部と胴部の接合部分に指頭圧痕が残る。	

第9表 SR1 出土遺物観察表（土器）

挿図 番号	区名	層名	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
76	I	VI層	須恵器 壺	20.0 (9.7) — —	— — —	大きく開く口縁部、端部下には突帯がめぐ る。波状文による文様帯が2ヶ所に施され る。	内面に回転ナデ痕が残る。	
77	I	VI層	〃	— (4.9) — —	— — —	頸部と肩部にヘラ状工具による指突文の文 様帯がみられる。	内外面とも回転ナデ。	
78	I	V層	〃	8.8 (3.1) — —	— — —	短かく上方を向く口縁部、無頸壺。	内面に回転ナデ痕が残る。	
79	II	VI層	甕	23.6 44.4 45.9 —	— — —	上胴部に最大径を有する体部、口縁部は大 きく開く、端部はわずかに上方につまみ上 げられる。口縁下には断面三角形の突帯が 巡る。	外面には平行タタキが残り、内面 は、同心円状のあて具痕をナデ消 している。	
80	I	V層	壺	— (4.3) — — 11.6	— — —	逆台形で中央が凹む高台の付いた底部から 立ち上がる。	外面回転ナデ調整。内面底部と胴 部の屈曲部に指頭圧痕が残る。回 転ナデ調整。	
81	III	VII層	〃	— (4.6) — — 9.6	— — —	ハの字状に開く断面長方形の比較的高い貼 付高台を持つ。	内外面ともヘラ削り痕が残る。	
82	I	VI層	(短頸)壺	18.8 (22.0) 23.4 —	— — —	短かく直立ぎみに斜め上方に開く口縁部端 部は面をなし上方を向く。	外面口縁部回転ナデ調整。胴部タ タキの後カキ目、内面口縁部回転 ナデ、胴部には同心円状のあて具 痕が残る。	
83	I	IV層下	甕	21.4 (4.3) — —	— — —	大きく開く口縁部、口縁端部は外傾する面 をなしナデ調整により凹線が1条入る。	外面横方向ハケ調整、内面回転ナ デ。	
84	I	VI層	〃	18.0 (7.2) — —	— — —	なめらかに外反して開く口縁部、端部は肥 厚し面をなし、刻目が施される。内面には ヘラによる短い沈線が見られる。	口縁部内外面とも回転ナデ、胴部 外面ハケ調整、内面には同心円状 のあて具痕が残る。	
85	I	V層	〃	44.4 (10.7) — —	— — —	大きく開く口縁部、端部はわずかに上方に 拡張され面をなす。肩部が貼る胴部を持つ と思われる。		
86	III	VII層	土師器 小皿	5.9 1.2 — — 4.6	— — —	上げ底ぎみの底部から短かく上方にのびる 口縁部、端部は丸く収める。	内面にロクロ目が残る。底部は糸 切りと見られる。	
87	I	V層	〃 坏	— (1.9) — — 11.0	— — —	逆台形状の貼付高台を有する。	内面、底部横ナデ。	
88	I	V層	須恵器 坏身	— (2.0) — — 10.4	— — —	断面方形の高台から立ち上がる。	内外面とも、ナデ調整、底部外面 回転ヘラ切り未調整。	
89	I	V層	〃 蓋	17.0 (1.5) — —	— — —	平坦な天井部から直線的に下方に下る。天 井部と口縁部との境に強いナデ痕が残る。 端部はわずかに下方につまみ出す。	外面回転ナデ、内面口縁部回転ナ デ、天井部静止で横方向ナデ調整。	
90	I	V層	土師器 皿	17.0 1.9 — — 11.1	— — —	平底から短かく外反して開く口縁部、端部 は丸く収める。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。	
91	I	V層	須恵器 〃	15.4 1.3 — — 11.2	— — —	平底の底部から外反ぎみに開く口縁部、端 部は丸く収める。	口縁部内外面とも強い回転ナデ、 底部、外部ヘラ切り後ナデ内面ナ デ。	
92	I	V層	瓦器 〃	8.7 1.5 — — 3.0	— — —	ほぼ平坦と考えられる底部から内湾ぎみに 大きく開いて立ち上がる。口縁部と体部の 境は、口縁部の強い横ナデによって段を有 する。	口縁部横ナデ、底部外面には、指 頭圧痕が残る。内面ヘラ磨きが残 る。	
93	I	IV層	〃 埴	14.8 4.0 — — 3.9	— — —	断面逆台形で凹線を持つ高台から内湾ぎみ に立ち上がる体部、口縁部は強い横ナデに よって外反ぎみになる。口径に比して器高 は低い。	口縁部の下まで指頭圧痕が残る。 口縁部に強い横ナデ、内面ヘラ磨 きが残る。	焼成は良 好でかた く焼きし まる。外 面の炭素 付着少な い。

第10表 SR1 出土遺物観察表（土器）

挿図番号	区名	層名	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
94	I	V層	瓦器 埴	15.0 4.6 — 4.8	— — — —	上げ底状にも見える低い断面三角形の貼付高台。体部は内湾して立ち上がる。	内面に平行ヘラ磨きが施される。	
95	I	V層	〃 〃	14.5 (4.3) — —	— — — —	内湾して立ち上がる体部、器高は低い。	口縁部内外面とも横ナデ調整、外面口縁下には指頭圧痕が残る。内面にはヘラによる荒い磨きが残る。	
96	I	V層	瓦質 羽釜	— — — —	— — — —	内傾する口縁部、口縁下には断面長方形でやや上方に伸びる鏝を有する。	外面に指頭圧痕が残る。	鏝の下には炭化物が付着。
97	I	V層	〃 〃	24.0 (5.3) — —	— — — —	やや内傾した口縁部、端部は面をなす。口縁部下には断面正方形の上方を向く鏝が付く。	鏝より上は横ナデ。	ススが付着、口縁下部焼成時と考えられる膨み。
98	I	V層	土師質 羽釜	21.0 (5.1) — —	— — — —	内傾する口縁部、口縁部下には断面三角形の鏝が付く。	わずかに指頭圧痕が残る。	
99	I	V層	青磁碗	— (1.6) — 5.8	— — — —	低い断面方形の削り出しの高台を持つ。	高台底面一部まで施釉される。外面には体部と高台との境に高台形成時の強い削り痕が一条残る。	青磁Ⅰ-5類
100	I	V層	白磁皿	— (1.4) — 6.9	— — — —	平底の底部から屈曲して立ち上がる。底部と体部の境に一条沈線が巡る。	内外面とも全面に施釉、底部外面に焼成時の重さね痕が残る。	白磁Ⅰ類
101	I	Ⅵ層	紡錘車	— — — —	— — — —	算盤珠形の土製紡錘車	丁寧な作り。	

第11表 遺物法量表（土錘）

挿図番号	遺構番号		器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				全長	全幅	全厚		
102	Ⅲ	Ⅵ層	土錘	(2.8)	1.1	1.1	(2.3)	
103	Ⅲ	Ⅶ層	〃	5.3	1.4	1.4	9.0	

第12表 SR1 出土木器法量表

挿図番号	遺構番号		器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				全長	全幅	全厚		
104	Ⅲ	Ⅸ層	ナスビ形木製品	49.4	15.9	1.0		
105	Ⅲ	Ⅸ層	ク	51.8	14.2	1.7		
106	Ⅱ	Ⅶ層	鋤	44.6	17.0	1.5		
107	Ⅰ	Ⅳ層	首 木	64.9	7.8	5.2		
108	Ⅲ	Ⅸ層	横 槌 把 手	12.2	3.9	1.8		
109	Ⅲ	Ⅸ層	横 槌	29.6	8.6	8.1		
110	Ⅰ	Ⅴ層	広鋤柄装着部	25.2	5.1	2.7		
111	Ⅰ	Ⅶ層	槽	91.2	11.8	3.8		
112	Ⅰ	Ⅴ層	機織り具部材	33.8	3.7	2.6		
113	Ⅰ	トレンチ	用途不明部材	(31.9)	3.8	1.5		
114	Ⅰ	Ⅴ層	櫛	5.0	(9.3)	0.9		
115	Ⅰ	Ⅴ層	曲物底板	14.9	4.5	0.6		
116	Ⅱ	Ⅶ層	用途不明	11.2	1.4	1.1		
117	Ⅰ	Ⅶ層	乳棒状木製品	45.8	5.3	5.1		
118	Ⅱ	Ⅶ層	舟形木製品	27.9	5.5	2.5		
119	Ⅲ	Ⅸ層	用途不明	28.8	5.5	2.3		

第13表 SR1 出土遺物法量表

挿図番号	遺構番号		器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				全長	全幅	全厚		
120	Ⅲ	Ⅶ層	管 玉	3.1	0.5	0.5	1.0	
121	Ⅲ	Ⅶ層	ガラス小玉	0.4	0.5	0.5		
122	Ⅰ	Ⅵ層	鉄 鎌	13.4	2.3	0.5	29.3	

第14表 SR1 出土遺物観察表 (石器)

挿図 番号	区名	層名	器種	全長 全幅 全厚 法量 (cm) 重量(g)	形態・文様	手法	備考
123	II	カクラン	石包丁	8.9 3.7 1.1 40.8	結晶片岩、両端が括られる。打製石包丁		
124	I	V層	石鏃	2.20 1.39 0.28 0.6	チャート製凹基式無茎石鏃、抉りが深く縄文時代の可能性が考えられる。		
125	III	VII層	◇	2.8 2.0 0.35 0.8	サヌカイト製凹基式無茎石鏃、抉りが深く124と同様に縄文時代の可能性が考えられる。		
126	III	VII層	◇	3.81 1.8 0.45 3.7	サヌカイト製平基式無茎石鏃		
127	I	V層	◇	3.56 1.71 0.42 2.1	サヌカイト製凹基式無茎石鏃		
128	I	V層	叩石	9.6 10.8 7.3 900.0	1面に擦痕が残り砥石を転用したものと考えられる。		
129	III	VII層	◇	11.5 8.3 6.95 960.0	両面とも半球形に凹む、磨石の可能性も考えられる。		
130	III	VII層	◇	10.0 8.1 5.1 700.0	砂岩、5面すべてに敲打痕が残る。		
131	I	V層	石斧 未製品	15.6 5.6 3.8 478.5	緑色岩、刃部成形中に破損したと考えられる、太型蛤刃石斧		
132	I	VI層	砥石	18.6 10.7 9.2 2400.0	砂岩、両面が使用される。		
133	III	VII層	石錘	7.2 5.75 4.2 175.0	砂岩と思われる円礫、側面が溝状になる。		

# 写 真 图 版







調査区完掘状況



調査Ⅰ・Ⅱ区完掘状況



SD 1 完掘状況



貝塚状遺構 1 検出状況



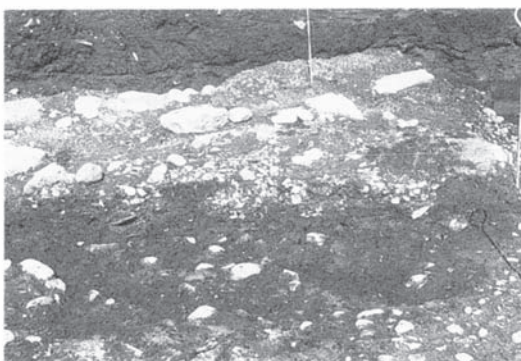
調査区調査前遠景



SD 1 土器出土状況



SK 1 検出状況



貝塚状遺構 1 セクション検出状況



I 区杭列検出状況



II 区杭列検出状況

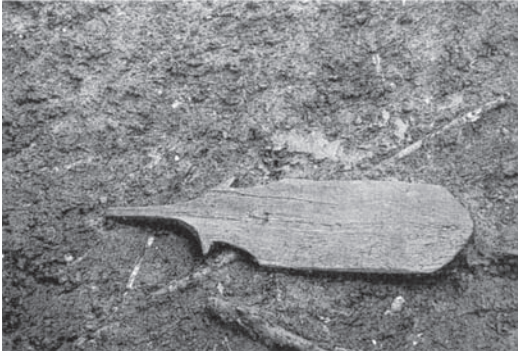


須恵器甕 (No. 79) 出土状況



同左下面出土状況

PL 4



No. 43, No. 51 出土状況



No. 64 出土状況



No. 105 出土状況



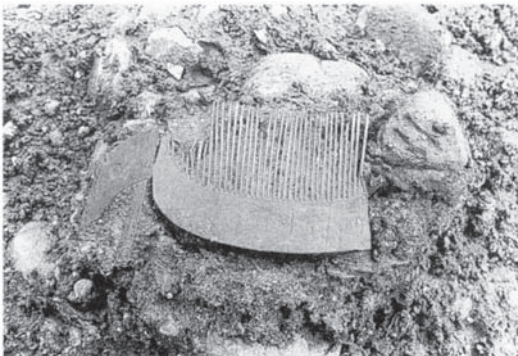
No. 106 出土状況



No. 107 出土状況



No. 111 出土状況



No. 114 出土状況



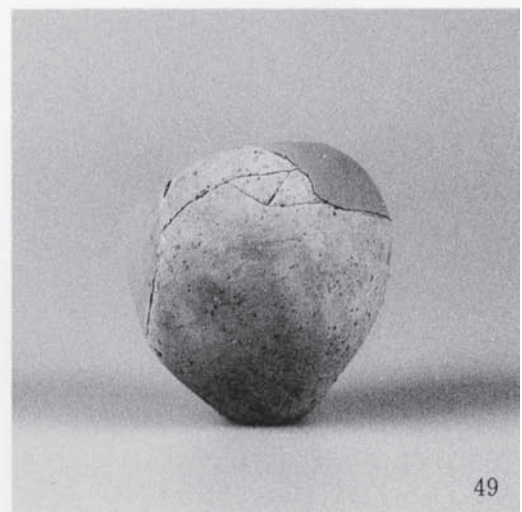
木製部材出土状況



出土土器 (SD1、貝塚状遺構1、SR1出土)



出土土器 (SR1 出土)

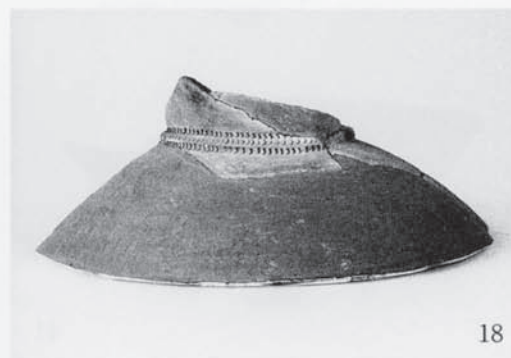
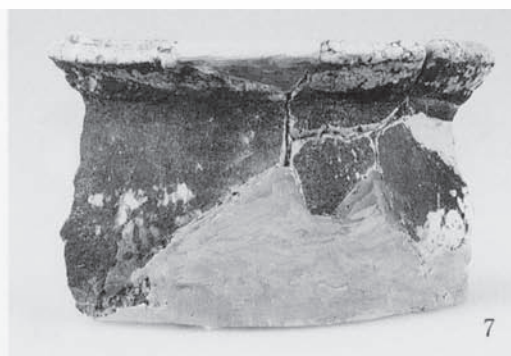


出土土器 (SR1 出土)



出土土器 (SR1 出土)

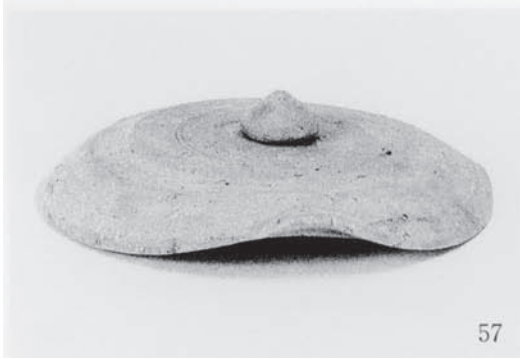




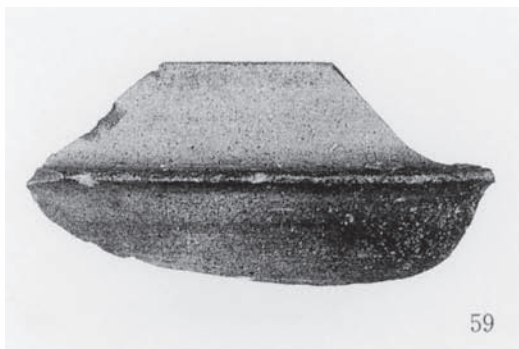
出土土器 (SR1 出土)



出土土器 (SR1 出土)



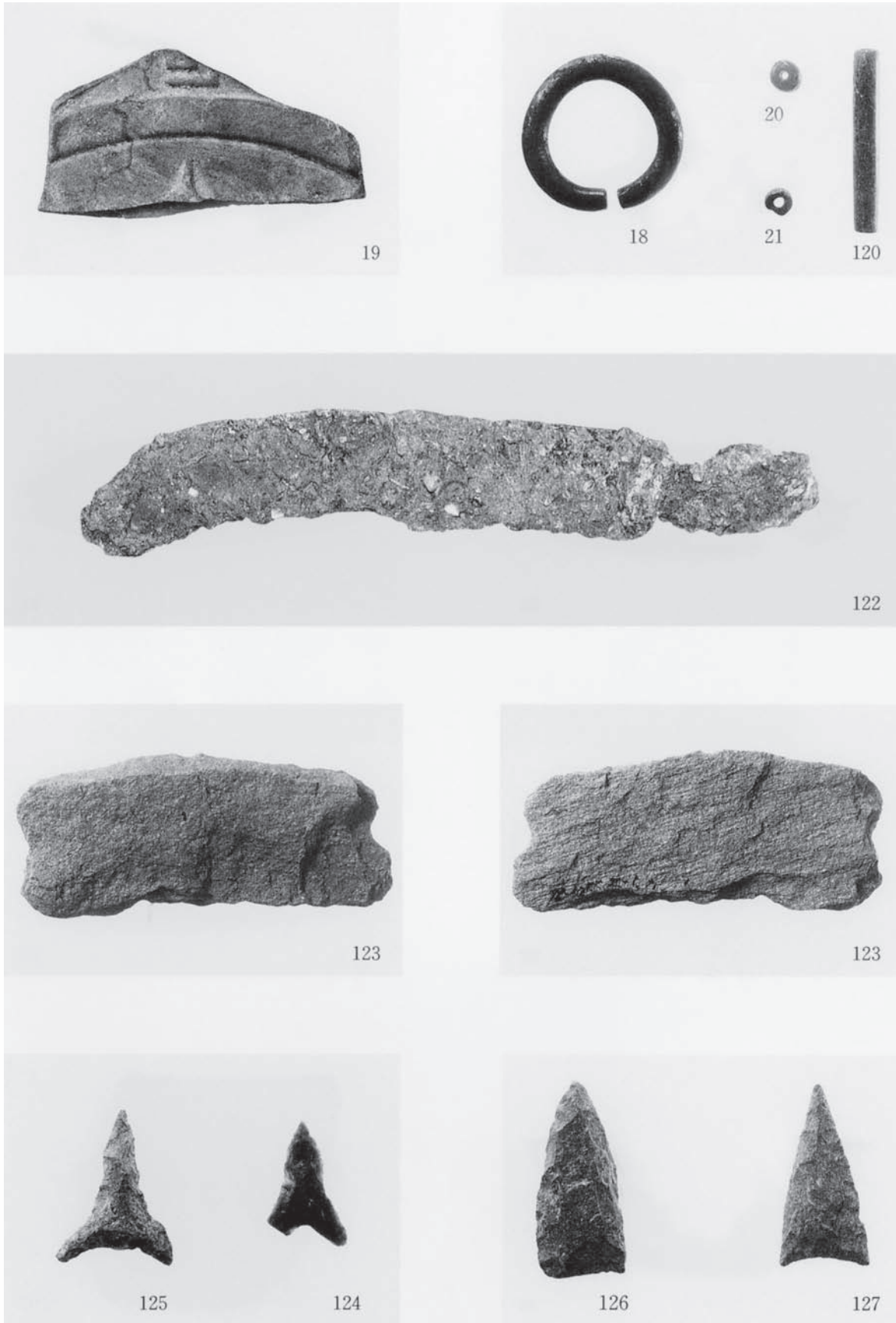
出土土器 (SR1 出土)



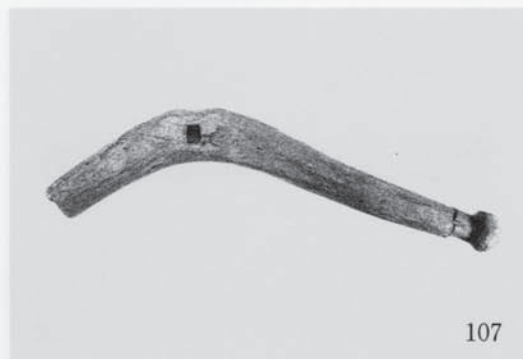
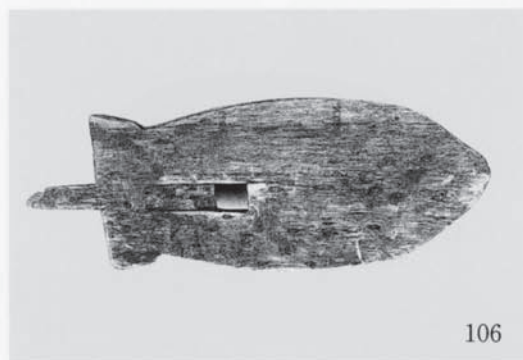
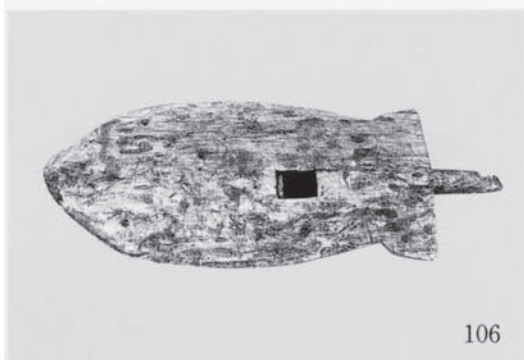
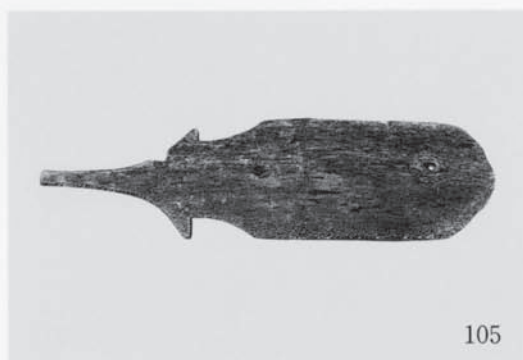
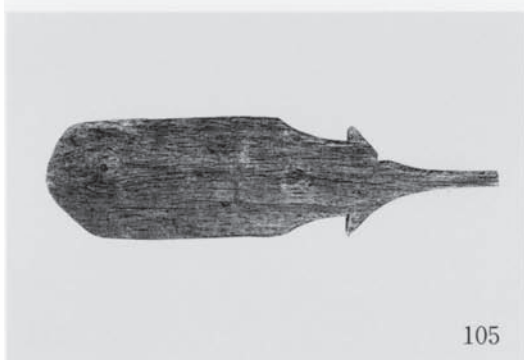
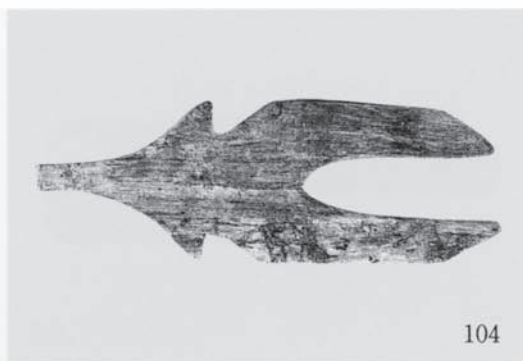
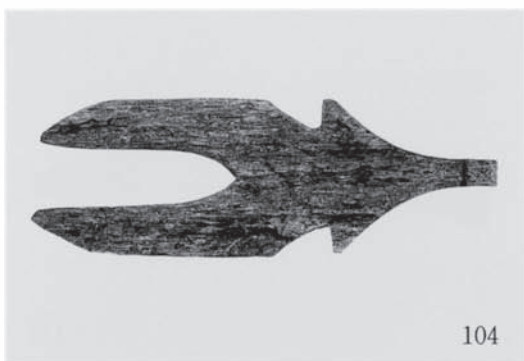
出土土器 (SR1 出土)



出土土器 (SR1 出土)



SD1、貝塚状遺構1、SR1 出土遺物（青銅器、玉類、鉄器、石器）



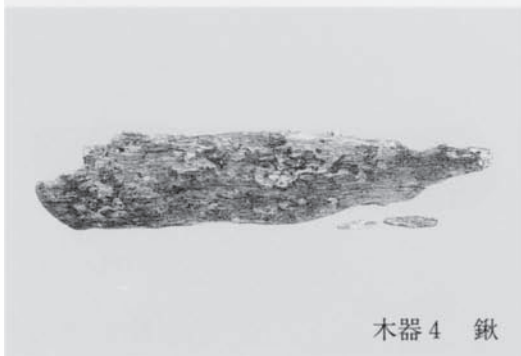
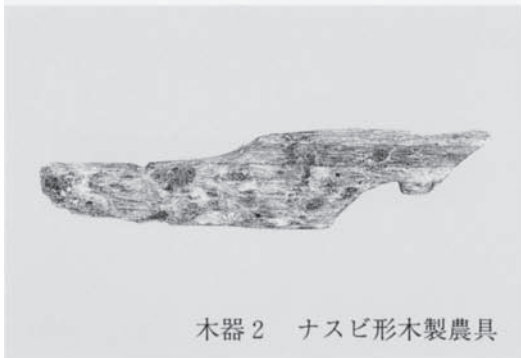
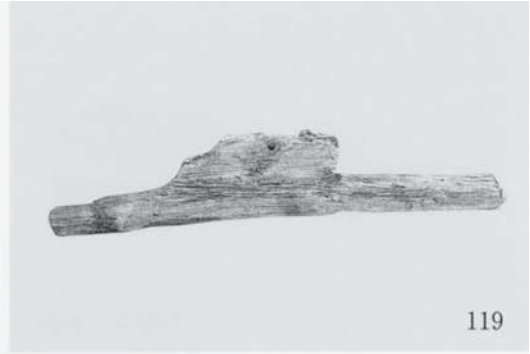
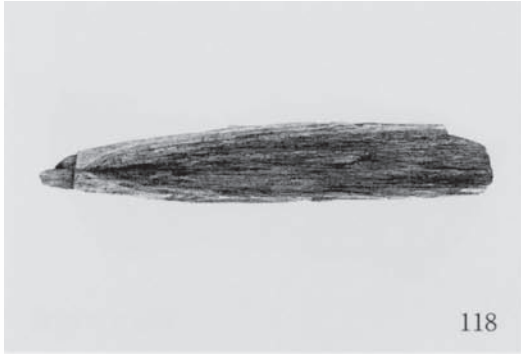
出土木器 (SR1 出土)

PL 16

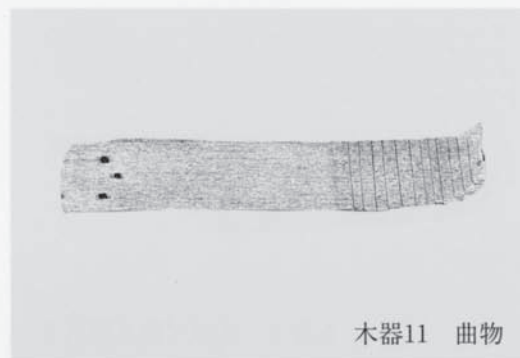
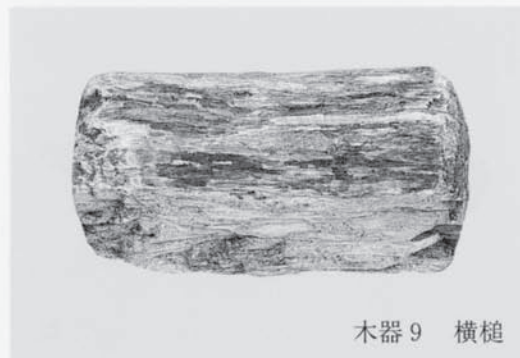
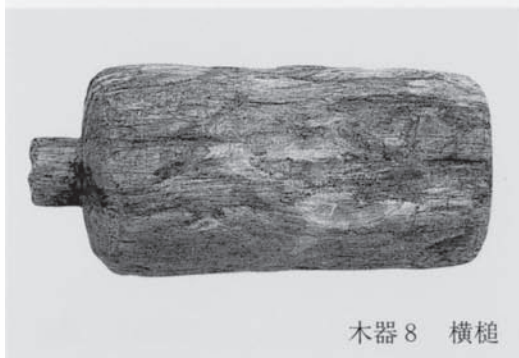
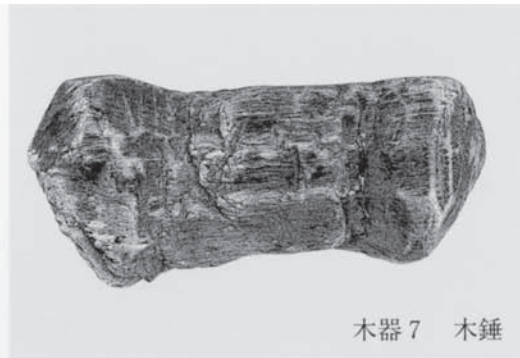
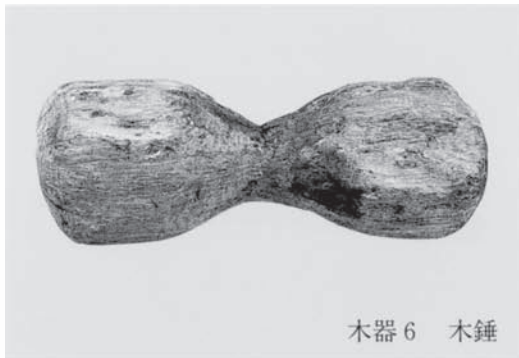


出土木器 (SR1 出土)

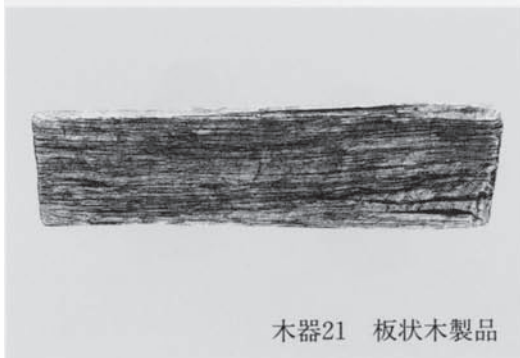
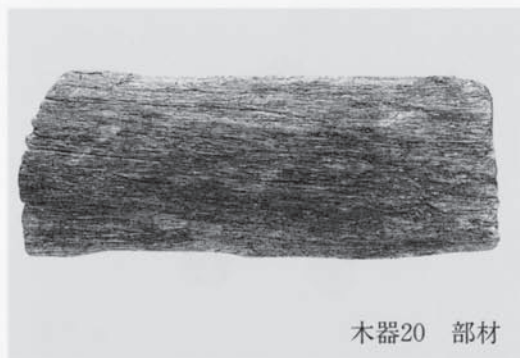
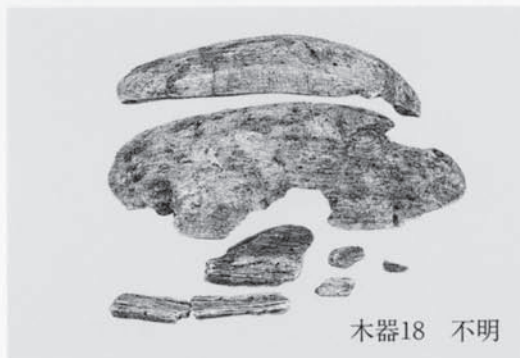
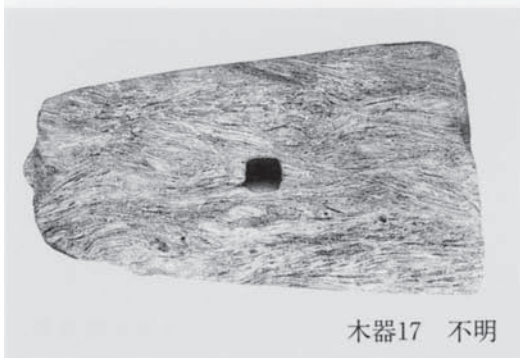




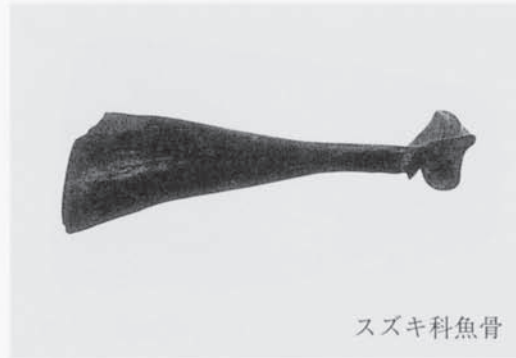
出土木器（貝塚状遺構1、SR1出土）



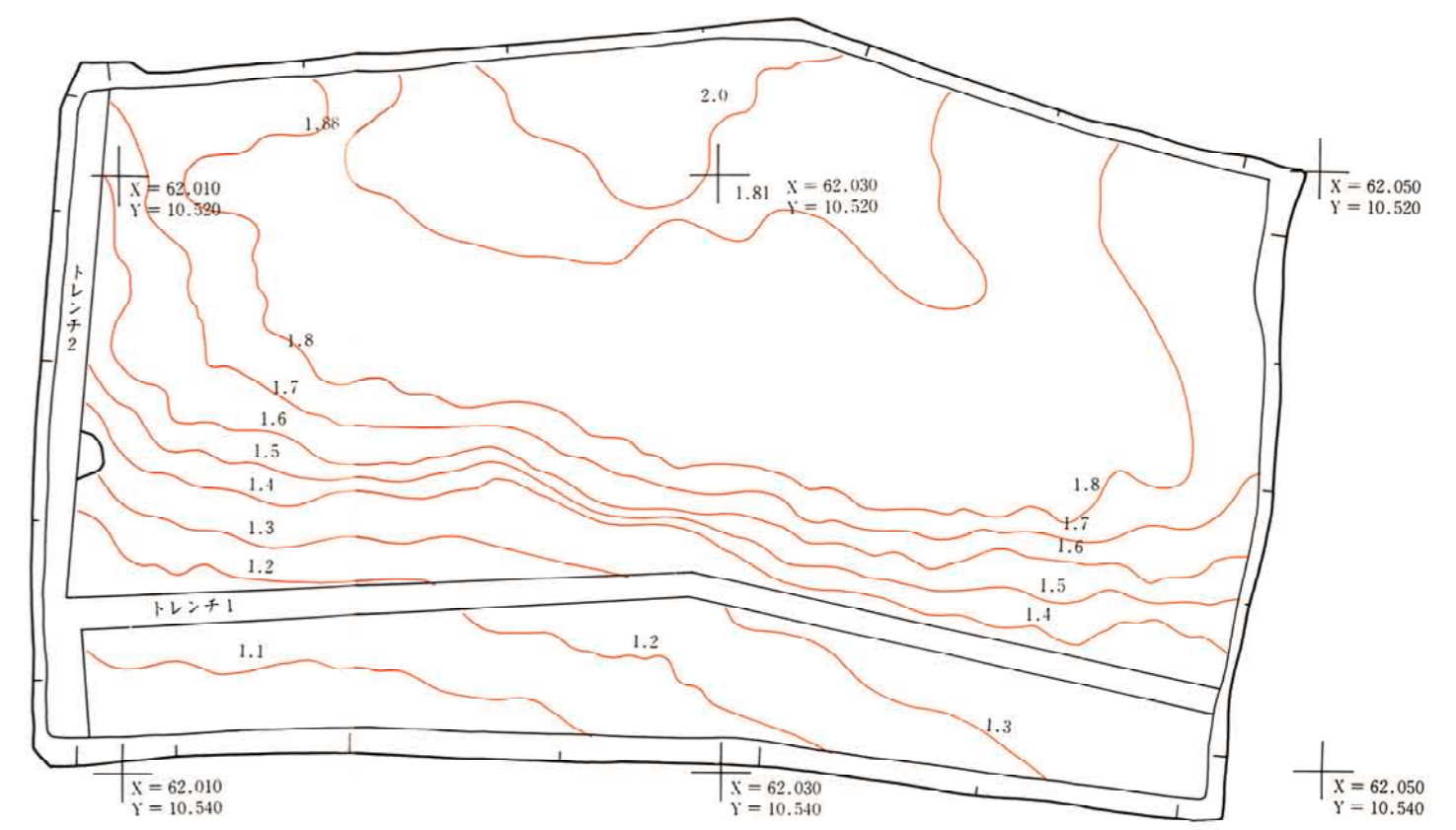
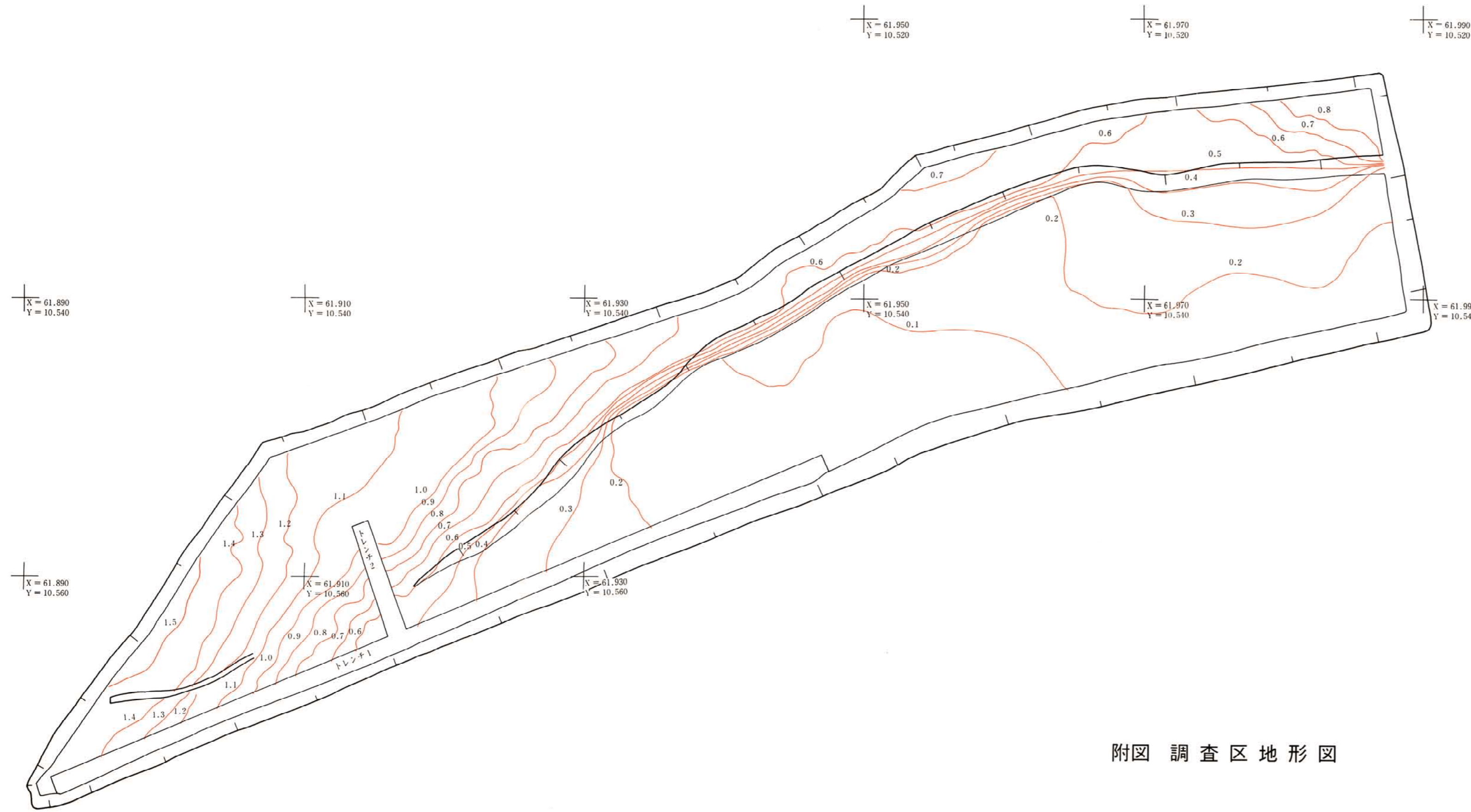
出土木器 (SR1 出土)



出土木器 (SR1 出土)



貝塚状遺構出土自然遺物



附図 調査区地形図



## 報告書抄録

ふりがな	けらいせき							
書名	介良遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	坂本憲昭・田坂京子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県高知市介良乙							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けらいせき 介良遺跡	こうちしけらおつ 高知市介良乙	39425	510016	33度 14分	132度 45分	平成6年 5月7日 } 平成6年 11月18日	3,000	緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
介良遺跡	散布地	弥生時代 前期 中期 後期 古墳時代 古代 中世	流路跡	弥生土器 須恵器 土師器 木器 石器 内行花文鏡片				

介 良 遺 跡

1997年 3 月

編 集 行  
発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原南泉1437-1  
電話 (0888) 64-0671

印 刷 西村 謄写堂